

2022 年 5 月

食料安全保障月報 (第 11 号)



令和 4 年 5 月 3 1 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 5 月食料安全保障月報（第 11 号）

目 次

概要編

I	2022 年 5 月の主な動き	1
II	2022 年 5 月の穀物等の国際価格の動向	3
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	3
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	3
V	今月の注目情報 中国のウクライナ産とうもろこし輸入の代替は？ （資料）	4
1	穀物等の国際価格の動向	8
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	9
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	10
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	12
5	食品小売価格の動向	16
6	海外の畜産物の需給動向（A L I C 提供）	17
7	FAO 食料価格指数の推移	19

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 冬小麦は減産も春小麦の回復から生産量は前年度に比べ 5.0%増加	
	＜カナダ＞ 干ばつ被害から回復し、生産量は前年度に比べ 45.9%増加	
	＜豪州＞ 生産量は史上最高の前年度を 17.4%下回る	
	＜EU27+英国＞ 主要生産国のフランスの生産量は前年度に比べ減少	
	＜中国＞ 小麦生産量は前年度に比べ 0.1%減少の 136.9 百万トン	
	＜ロシア＞ 小麦輸出量は世界第 1 位	
	＜ウクライナ＞ロシアの侵攻により小麦の輸出量は前年度に比べ 47.4%減少	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は主に収穫面積減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ロシアの侵攻の影響等で生産量・輸出量が大幅に減少見通し	
3	コメ	15
	＜米国＞ 2 年連続生産量・輸出量ともに減少	
	＜インド＞ 輸出量は世界全体の約 41%を占める	
	＜中国＞ 生産量・消費量・輸入量がともに史上最高	
	＜タイ＞ インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国に	
	＜ベトナム＞2021/22 年度の冬春作の収穫が終了し、夏秋作の作付け開始	

Ⅱ 油糧種子	
大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
＜米国＞	生産量は史上最高、輸出増の見通し
＜ブラジル＞	2021/22 年度の収穫終盤、高温・乾燥で減産見通し
＜アルゼンチン＞	2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続
＜中国＞	増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し
＜カナダ＞	収穫面積の増加により増産、輸出量も増加見通し

特別分析トピック

ブラジル、豪州、カナダ、スイスの農業政策の概要

【利用上の注意】

表紙写真：米国のミネソタ州のとうもろこしの作付け（4月 27 日撮影）
例年と比べて低温の中、作付けが行われている。

(概要編)

I 2022 年 5 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は成熟期で、その他の作物は作付けから初期生育期、南米では、今後作付けが開始される。

品目別にみると、5 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、世界の小麦については、生産量は前年度より減少する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、ウクライナの小麦生産量・輸出量が前年度より大きく減少し、国際相場は過去最高を更新した後も、高い水準で推移しており、今後も注視が必要。

一方、とうもろこしについては、世界の生産量は前年度より減少する見通しで、同様にウクライナの生産量・輸出量が大きく減少している。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通しである。いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：4 月）については、肉類（119→122）が過去最高になったものの、穀物（170.1→169.5）、植物油（252→238）が下落した影響により、3 月より下落（160→159）した。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録。それ以降は下落傾向で推移していたが、本年 2 月以降は再び上昇傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、5 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



1 ウクライナの春作物の作付・生産見通し

ウクライナの小麦の大半を占める冬小麦は 5 月現在、成熟期を迎えている。また、ウクライナ農業政策食料省によると、春作物の作付けは 5 月 12 日時点で作付予定面積の 90% 近く進展しており、春小麦は 18.8 万ヘクタール作付け（作付予定面積 19.0 万ヘクタール）、とうもろこしは 323.9 万ヘクタール作付け（作付予定面積 485.4 万ヘクタール）となっている。

米国農務省（USDA）によれば、2022/23 年度のウクライナの小麦生産量はロシアの侵攻の影響を受け、対前年度比 34.9% 減の 2,150 万トン、輸出量は、減産に加え、インフラの被害から大きく減少し、対前年度比で 47% 減の 1,000 万トンの見通し。また、とうもろこし生産量については、小麦以上に減産となり、対前年度比では 54% 減の 1,950 万トン、輸出量は、対前年度比で 61% 減の 900 万トンの見通し。

2 米国の春の作付け遅れと生産見通し

米国農務省（USDA）によれば、5 月 16 日時点の 2022/23 年度のとうもろこし、大豆、春小麦の作付けの進捗率はそれぞれ 49%、30%、39% と前年度及び過去 5 年平均より遅れている。主に、コーンベルトでの低温や雨がちな天候が要因となっている。一方、冬小麦については主産地の乾燥の影響等により同日時点の出穂率が 48% と前年同期（51%）、過去 5 年平均（53%）より遅れており、作柄も「良からやや良」の比率が 27% と前年同期（48%）を下回っている。

春作物については現時点の作付～初期生育段階で 2022/23 年度の実産量を見通すことは難しい。USDA によれば、前年度の春小麦の記録的な減産からの回復により小麦計で 4,710 万トンと前年度より 5.0% 増加する見通し。とうもろこしは肥料価格高騰に伴う作付面積減に加え、作付け遅れによる単収の伸び悩みから、3 億 6,730 万トンと前年度より 4.3% 減少する見通し。一方、大豆は作付面積増から前年度より 4.6% 増の 1 億 2,630 万トンと史上最高となる見通し。

なお、バイデン大統領は 5 月 11 日に農家支援・増産政策として、二毛作の推進につながる作物保険の見直しや、肥料産業への補助金の倍増（2 億 5,000 万ドル→5 億ドル）等を公表した。

3 インドの小麦が収穫期の高温乾燥の影響を受け輸出規制

インドは、2022/23 年度産小麦が収穫期の 3～4 月にかけて高温乾燥の被害を受け、さらにロシアのウクライナ侵攻に伴う代替需要による輸出増加を要因とした国内の価格高騰懸念から、5 月 14 日からの小麦の輸出停止を公表した。ただし、輸入国側の食料安全保障確保のため要請があった場合などは例外的に輸出が認められると報道されている。

従来、ウクライナ産穀物を輸入していたエジプトなど中東やアフリカの穀物輸入国が代替先としてインド産の輸入を検討しており、エジプト政府は輸出禁止の例外扱いとするようインド政府と協議を行った結果、一部の輸入が認められたとみられる。

II 2022 年 5 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、4 月末、380ドル/トン台前半で推移。5 月に入り、インドの輸出制限の懸念やウクライナ産の輸出の停滞から、400ドル/トン前後に値を上げたものの、米国産冬小麦の主産地であるプレーンズでの降雨から一時390ドル/トン台に値を下げた。その後、インドの輸出停止を受け460ドル/トン台後半に値を上げたものの、国連のウクライナ産穀物輸出再開に向けた支援計画、ロシアの豊作見通し等から値を下げ、5 月下旬現在、420ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、4 月末、320ドル/トン台前半で推移。5 月に入り、ロシアのウクライナ侵攻の継続、原油価格の高止まりの一方、米国中西部の低温や雨がちな天候で遅れていた作付けが天候改善により早いペースで進捗するとの期待から価格は緩やかに下落し、5 月下旬現在、300ドル/トン台後半で推移。

コメは、4 月末に450ドル/トン前後で推移。5 月に入り、バーツ安にもかかわらず、イラク等からの強い需要により価格は480ドル/トン台前半まで上昇。その後、インド産等との価格競争により下落し、5 月下旬現在、470ドル/トン台後半で推移。

大豆は、4 月末、620ドル/トン台後半で推移。5 月に入り、コロナ感染封じ込めに伴うロックダウンによる中国の需要低迷の懸念等から 5 月上旬に590ドル/トン台半ばまで価格が下落したものの、米国の輸出が中国向けを中心に好調なペースを維持していること、ロシアのウクライナ侵攻の継続やインドネシアのパーム油の輸出規制等による植物油価格全体の高止まり等から再び価格が上昇し、5 月下旬現在、620ドル/トン台後半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度比 1.0%減の 27.7 億トン。消費量は、前年度比 0.2%減の 27.9 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.1%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度比で、小麦、とうもろこしで減少、コメで増加となり、穀物全体で減少となり、27.7 億トンの見込み。

消費量は、前年度比で、小麦、とうもろこしで減少し、コメで増加となり、穀物全体で減少となり、27.9 億トンの見込み。

貿易量は、前年度比で、小麦、コメで増加し、とうもろこしで減少し、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.8 億トンと前年度より減少、期末在庫率は前年度より低下する見込み。

(注：数値は 5 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.5 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、19.0%となる見込み。

(注：数値は 5 月の USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

Ⅵ 今月の注目情報：中国のウクライナ産とうもろこし輸入の代替は？

中国は、2021年、800万トン以上のウクライナ産とうもろこしを輸入していたが、2022年2月のロシアのウクライナへの侵攻で輸入が困難となった。一方、需要面でもコロナによるロックダウンによる経済の減速が懸念されているが、1～3月の穀物輸入は増加している。中国の穀物の輸入動向と世界の穀物の貿易の関連についてまとめた。

1 ウクライナの生産・輸出動向

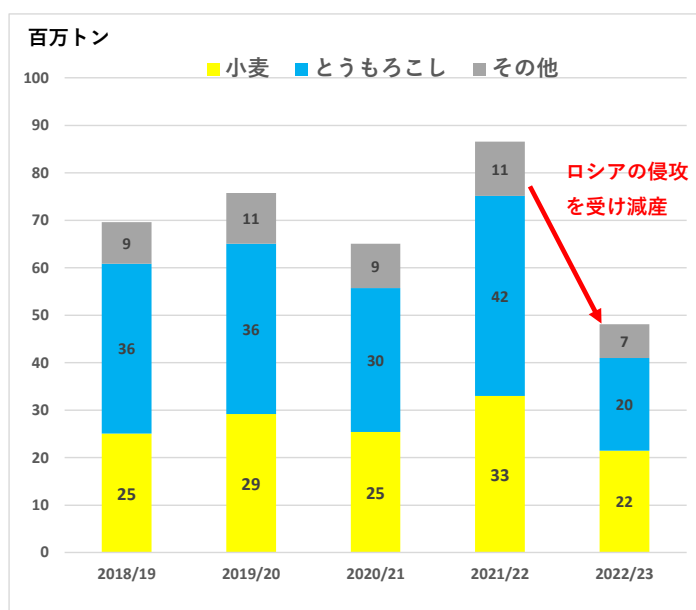
(1) 小麦

米国農務省（USDA）の2022年5月の需給見通しによれば、ウクライナの前年度2022/23年度の小麦については、史上最高であった前年度比35%減の2,150万トンとの生産見通しとなっている。ウクライナは冬小麦が中心で、前年秋までは天候に恵まれ順調に生育していたとみられるが、本年2月以降のロシアの侵攻により、前年度と比較して、収穫面積は21%減の585万ヘクタール、単収は18%減の3.68トンへ低下するとみられている。輸出についても減産に加え、インフラが被害を受けたことや、黒海のオデッサ港等からの輸出がロシアにより封鎖されているため、対前年度比47%減の1,000万トンとなると見込まれている、前年度までの主要輸出先はエジプトなど、北アフリカ、中東諸国である。

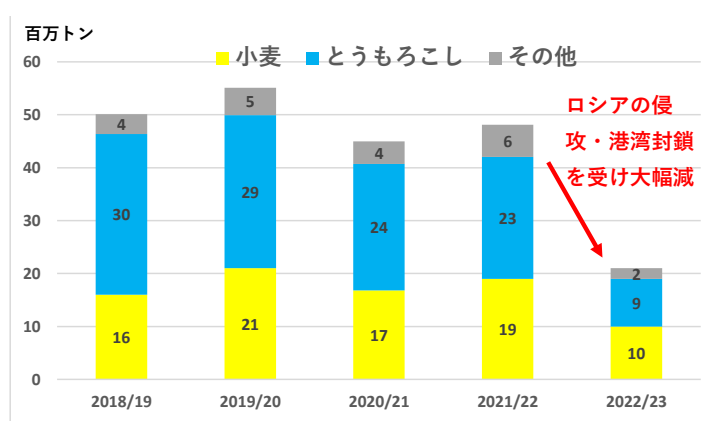
なお、ウクライナは、鉄道輸送により、ルーマニアの黒海沿いのコンスタンツァ港からの輸出に加え、ポーランドなどからバルト海の港からの輸出など、EU諸国を経由した輸出も検討しているとみられる。しかし、ウクライナとEUの鉄道の軌道幅の相違等の課題から以前の輸出量の代替は難しい。

図1 ウクライナの穀物の生産・輸出見通しの推移

(1) 生産量



(2) 輸出量



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 5)

(2) とうもろこし

USDAによれば、4月以降、作付けが開始された2022/23年度のとうもろこしについても、ロシアの侵攻を受け、小麦同様、前年度比で半減以上の1,950万トンとなると見込まれている。輸出量についても前年度比で61%減の900万トンと見込まれている。

とうもろこしの減産幅（▼2,260万トン）が（小麦▼1,151万トン）と比べて大きい。2022/23年度の穀物全体の収穫面積は20%減の見通しであるが、特にとうもろこしは36%減

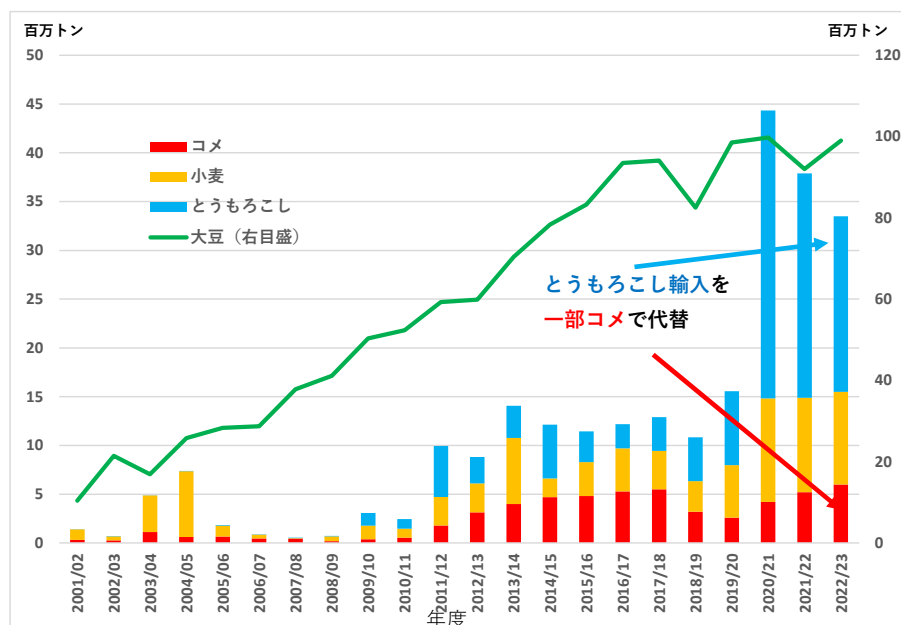
と減少幅が大きい。その背景として、とうもろこしは肥料の投入コストが他の作物と比べて高く肥料価格が高騰していることや、ロシアによる黒海封鎖のため輸出の見通しが立たないこと等から、他の穀物や油糧種子に作付けを切り替えたとみられる。なお、前年度まで主要輸出先は中国と EU となっている。特に中国向け輸出は 2021 年には 800 万トンを超えていた。

2 中国の需要と輸入動向

(1) 2021 年の輸入動向

中国の穀物輸入に関しては、中国の貿易統計データによれば、2021 年はアフリカ豚熱からの回復により、飼料向け需要が増加したことから、とうもろこしは対前年度比 2.5 倍の 2,836 万トンに増加した。そのうち、米国産が 1,983 万トンと 7 割を占め、残りはほとんどウクライナ産 (824 万トン) であった。また、とうもろこしの価格高騰により小麦に需要がシフトしたことから、小麦の輸入量も対前年比 19% 増の 972 万トンとなった。小麦については、豪州、米国、カナダ産がそれぞれ 3 割弱を占めている。大豆については、搾油マージンの悪化などから前年比 4% 減の 9,653 万トンと減少した。一方、コメの輸入についてはとうもろこし価格の高騰による飼料用向け需要増もあり、安価なインド産米を中心に増加し、1.7 倍の 490 万トンとなった。

図2 中国のコメ、小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 5)

(2) 2022 年の需要・輸入動向

現時点の中国の穀物需要については、USDA によれば、3 月に国際価格が史上最高値を更新した小麦の需要については、前年度と比べて 400 万トン減の 1 億 4,400 万トンとなるも、とうもろこしについては逆に 400 万トン増加し、2 億 9500 万トンの見通しとなっている。コメについても、120 万トン増の 1 億 5660 万トンの見通しとなっている。大豆についても搾油需要の回復から対前年度比 6.3% 増の 1 億 1,560 万トンが見込まれている。

一方、2022/23 年産の中国のコメ、小麦、とうもろこしの生産量については、今後の天候にもよるが、USDA によれば、コメは前年度並みの 1 億 4900 万トンを維持も、小麦は前年度比 1.4% 減の 1 億 3,500 万トン、とうもろこしは 0.6% 減の 2 億 7,100 万トンの見込みである。

3 月以降、穀物産地の吉林省や、上海、北京など都市部で新型コロナウイルスの感染拡大によるロックダウンが報道され、経済成長への影響が懸念されている。なお、中国海関統計による 2022 年 1～3 月の穀物等の輸入動向は、大豆については、前年度比 4% 減の 2,029 万トンと減少している。一方、小麦は対前年同期比 0.4% 増の 304 万トン、とうもろこしは 6% 増の

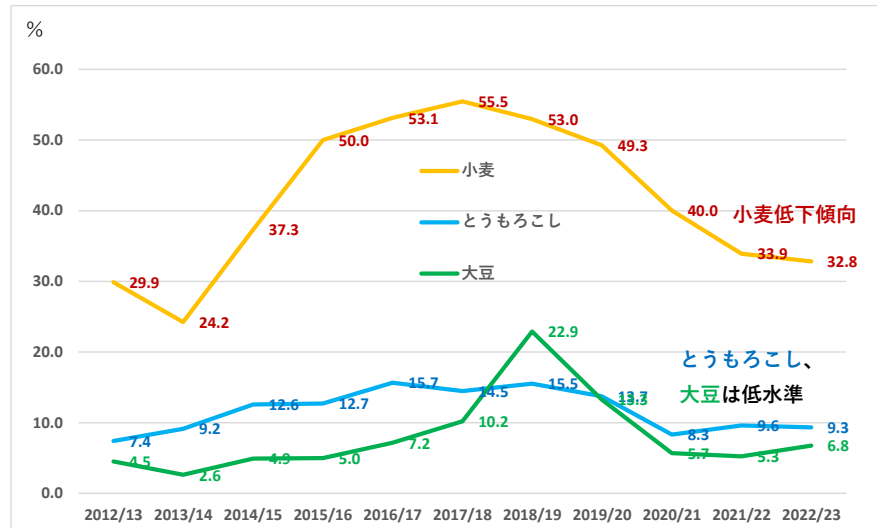
710 万トン、コメは 17% 増の 165 万トンといずれも増加している。

このような情勢の中、李総理は、4 月 20 日に、食料確保の強化を強調し、2022 年産穀物等の収穫の確保を進めることにしている。

3 ロシアのウクライナ侵攻による中国の穀物輸入への影響

中国の穀物輸入の中で、とうもろこしについては、ウクライナ産を年間 800 万トン以上輸入しており、ロシアのウクライナ侵攻の影響を直接受けたとみられる。中国海関統計のデータによれば、1～3 月までの間は、ウクライナからの輸入は前年を上回る輸入量が記録されているなど、その影響は数字には表れていないとはされているものの、

図3 米国の小麦、とうもろこし、大豆の期末在庫率の推移



今後、ウクライナ産とうもろこしにつ 出典：米国農務省 「PS&D」(2022.5)

いては、他国産で代替するか、他品目

で代替するか、国内備蓄を切り崩す等の対応がとられることとなる可能性があるとみられる。

USDA によれば、中国の 2022/23 年度末のとうもろこし在庫は前年度末より減少すると見込まれている。そこで、従来から米国産とうもろこしを輸入してきたことから、ウクライナ産の代替として米国産の輸入量を増加させる可能性が想定される。しかしながら、米国産とうもろこしは、肥料価格の高騰により、施肥コストの少ない大豆などへ作付けがシフトしたとみられており、USDA の 5 月見通しでも、生産量は 4% 減の 3 億 6,730 万トン、期末在庫率は前年度(9.6%)より低下し 9.3% と見込まれている。ウクライナ産の代替として中国向け輸出が増加した場合は、さらに在庫率の低下の可能性も想定される。

4 ブラジル産とうもろこしやインド産碎米への代替

今までブラジル産大豆を大量に輸入してきた中国は、ブラジル産とうもろこしに関しては植物検疫の関係もあり、ほとんど輸入は行っていなかった。しかし、検疫問題については、輸入の確保のため、本年 2 月にはロシア産小麦の輸入について地域限定を解除し、5 月にはカナダ産菜種についても従来禁止していた 2 つの輸出業者からの輸入を解除してきた。5 月 23 日には、中国政府は、ブラジル産とうもろこしについても検疫問題をクリアし合意に至ったと公表した。ウクライナ産とうもろこしの調達が難しくなったことが背景にあるとみられる。

確かに、ブラジル産とうもろこしに関しては、冬とうもろこしが干ばつ、霜害の影響を受け減産(8,710 万トン)となった 2020/21 年度産に対し、2021/22 年度は、作付面積の増加により生産量は 1 億 1,000 万トンを超えるとみられている。しかし、4 月以降の主産地のマツグロソ州の乾燥の影響等から、CONAN(ブラジル食料供給公社)は 5 月レポートで一度公表した 1 億

1,620 万トン を 1 億 1,460 万トン に引き下げ修正した。今後、5 月以降のパラナ州などの降霜の懸念から、生産量がさらに下方修正される恐れもあるとみられる。

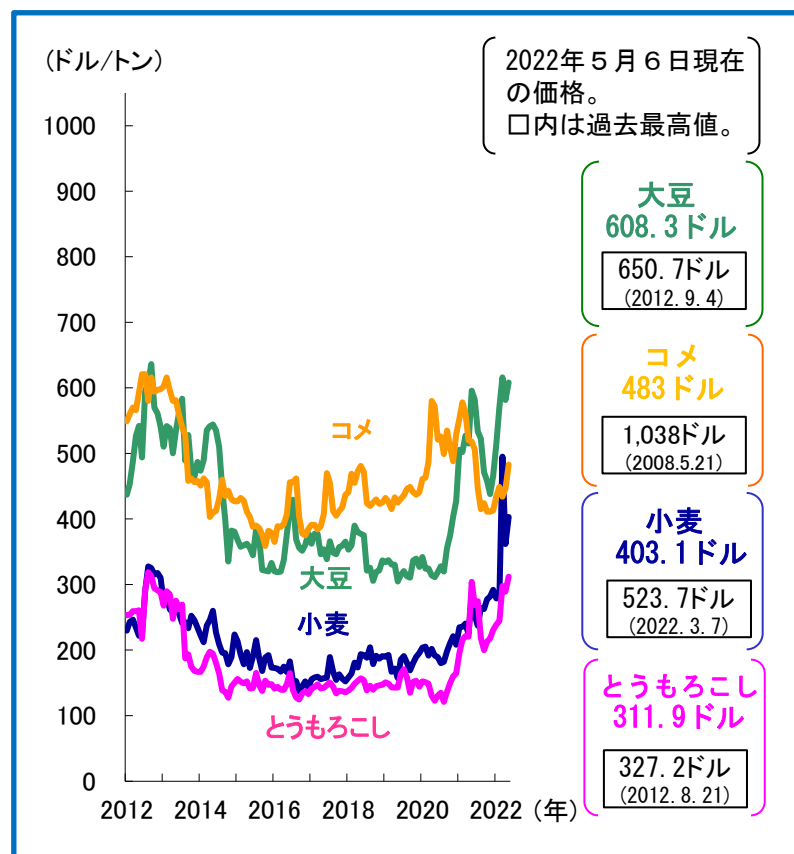
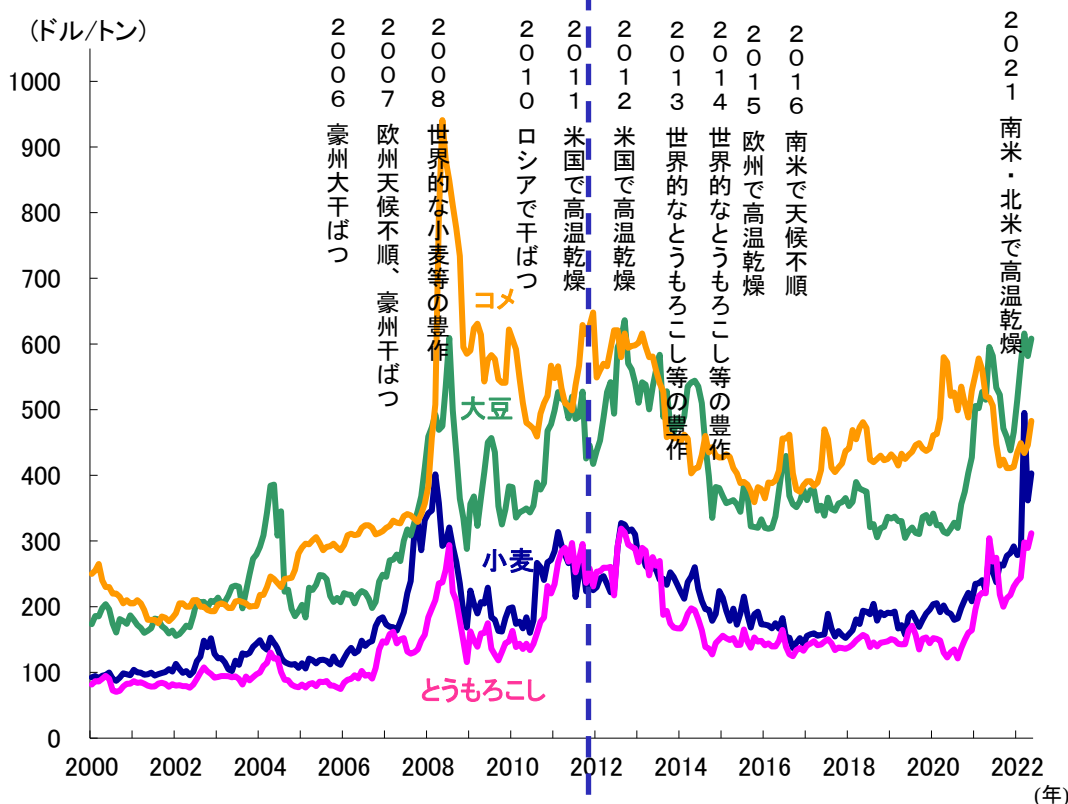
また、現在のとうもろこしや小麦の国際相場が過去最高値に近い高水準で推移しているため、中国は、飼料の配合設計を従来のとうもろこしや小麦から、一部安価なインド産碎米等に切り替えているとみられ、今後、コメの輸入をさらに増加させる可能性もあると想定される。

ただし、インドが 3 月から 4 月にかけての熱波の影響で小麦が減産見通しとなり、エジプトをはじめとする中東諸国からウクライナ産の代替としての輸入需要が強いことから、インド政府は 5 月 14 日以降の小麦の輸出制限を発表した。輸入国側から食料安全保障上インド産小麦の輸入について要請を受け、インド政府が認めた場合等は例外とされている。なお、2007 年から 2008 年の穀物価格高騰時には、インドは国内の食料安全保障確保のため、小麦と同時にコメの輸出も規制を行ったこともある。中国の今後の穀物等の輸入動向やインドの輸出動向については注視が必要である。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、さらに上昇し、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



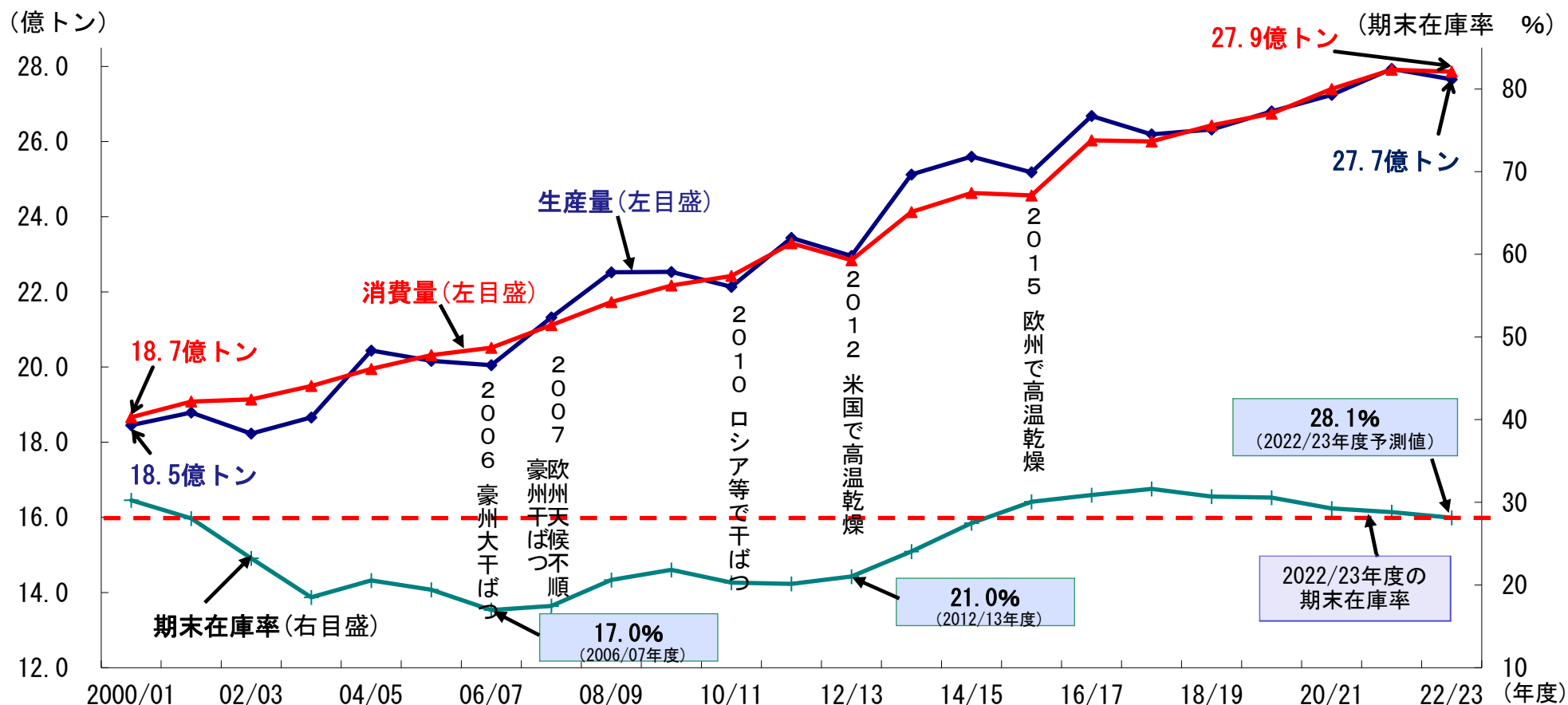
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.1%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

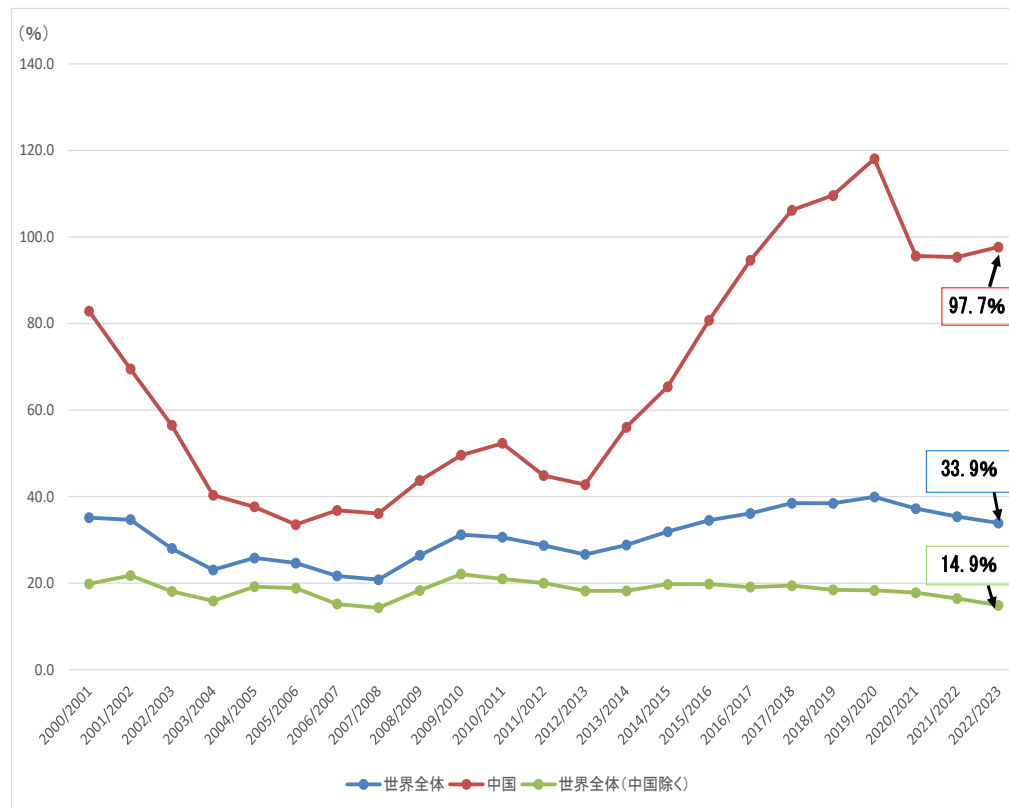


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(May 2022)、「PS&D」

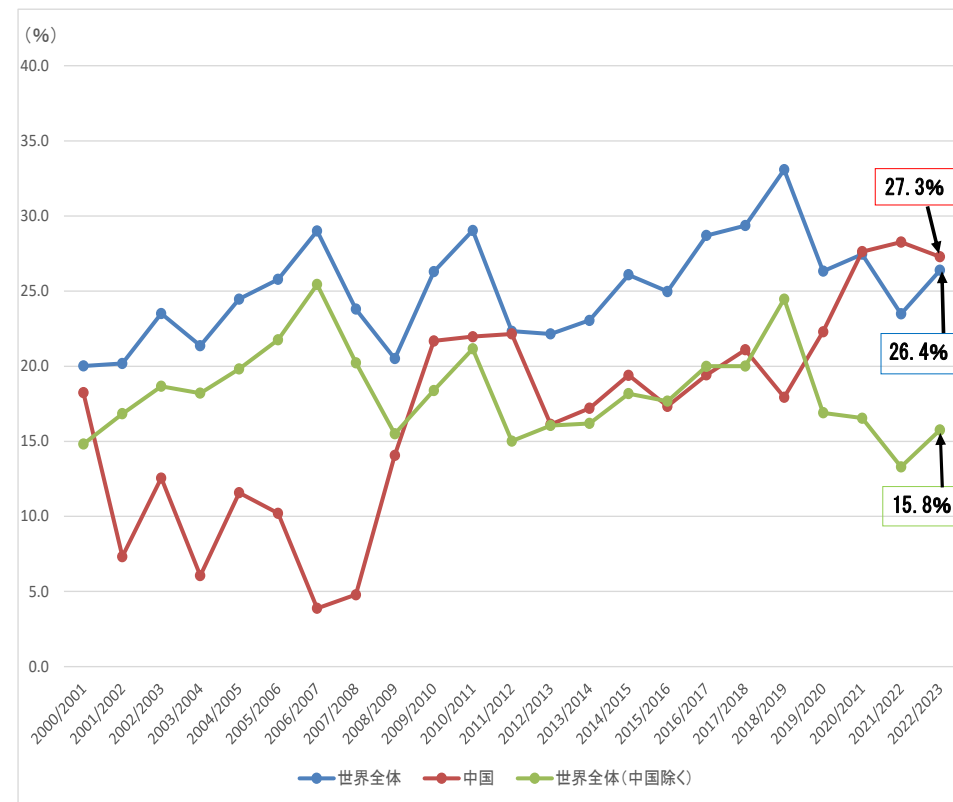
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(May 12, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

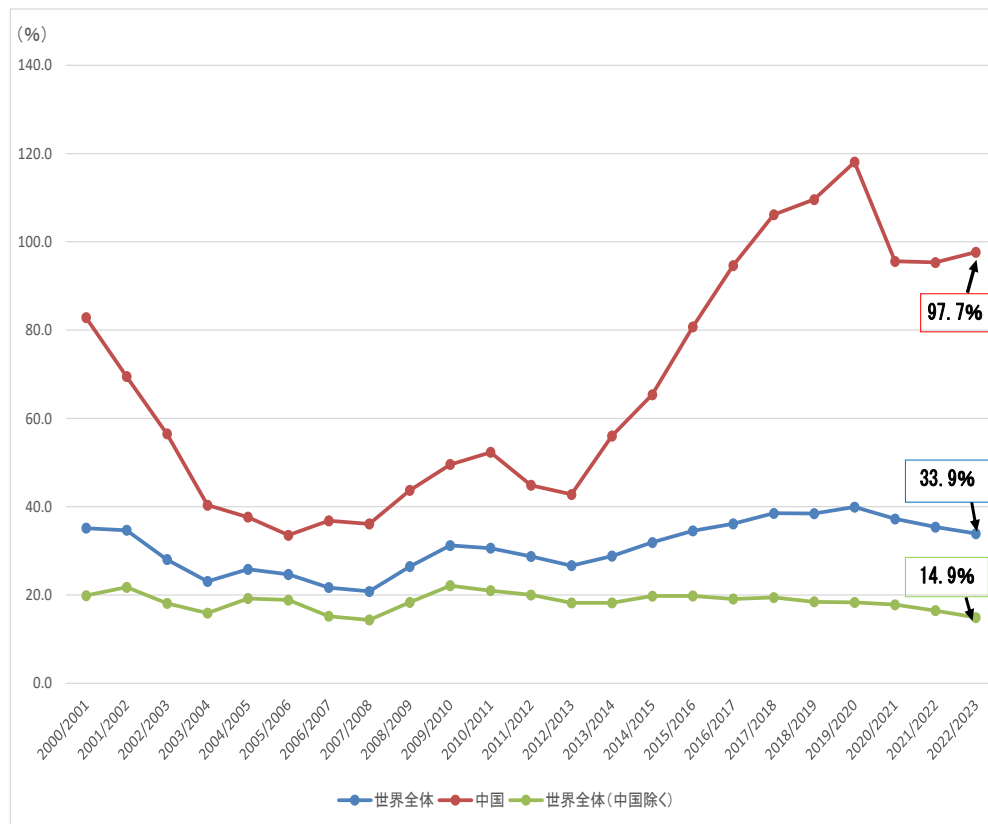
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

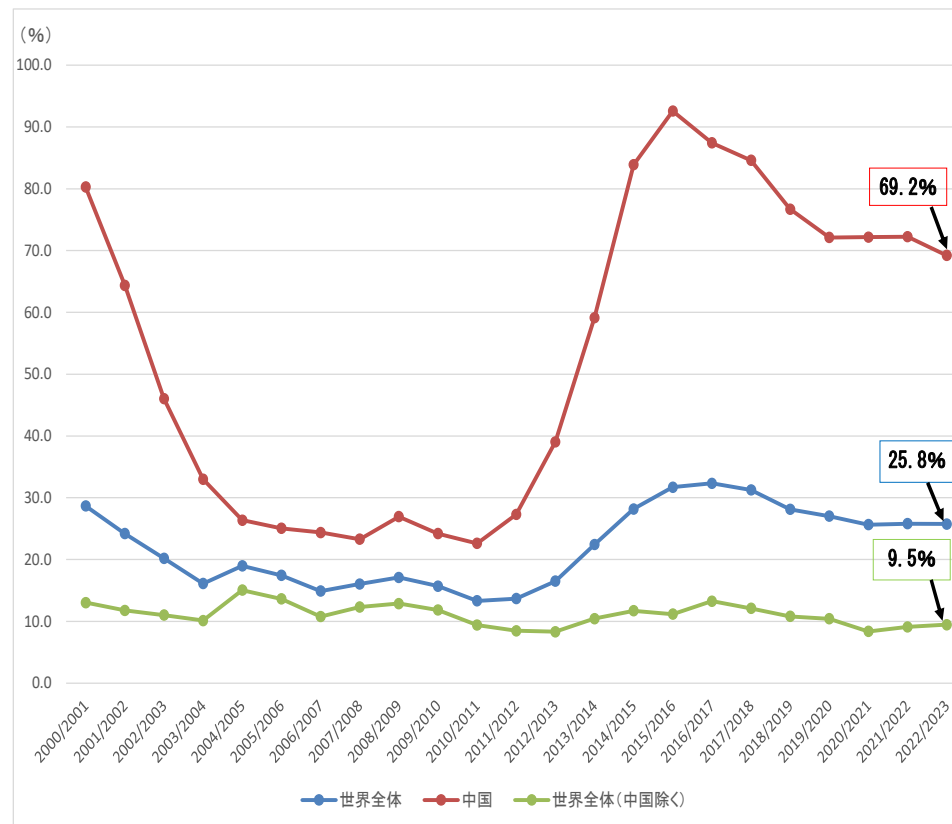
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(May 12, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

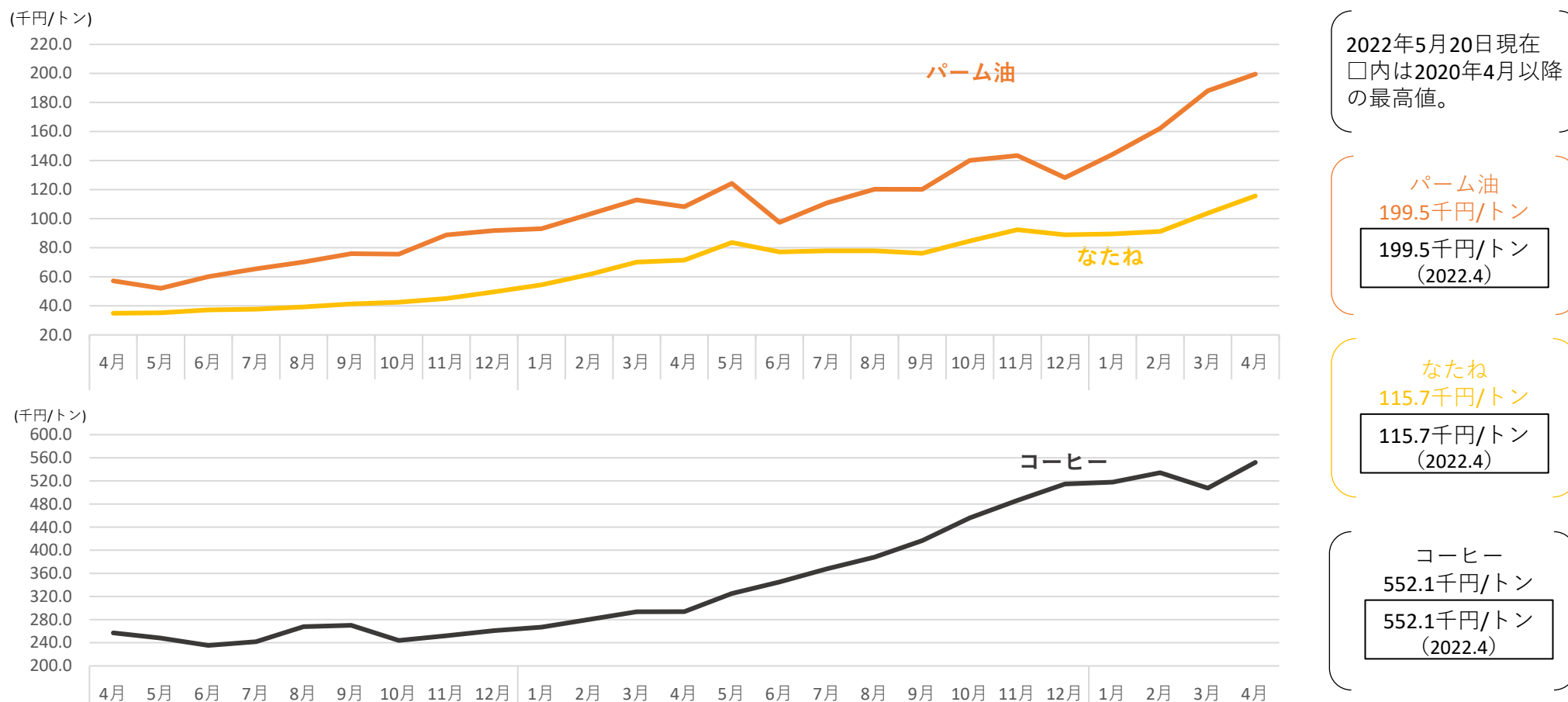
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっているほか、インドネシアによるパーム油の輸出制限（5月23日解除）が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

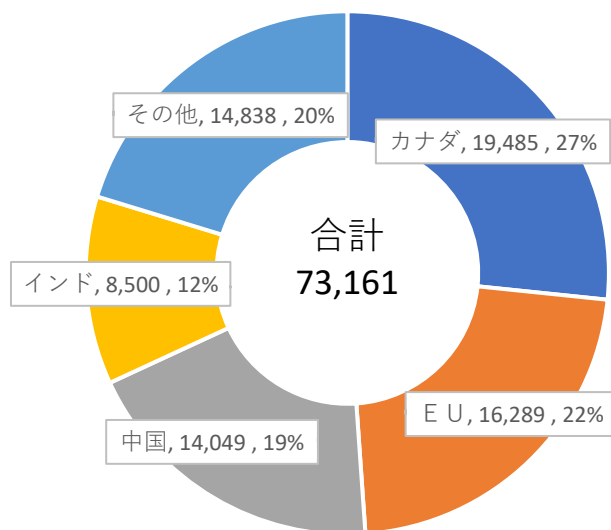


※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

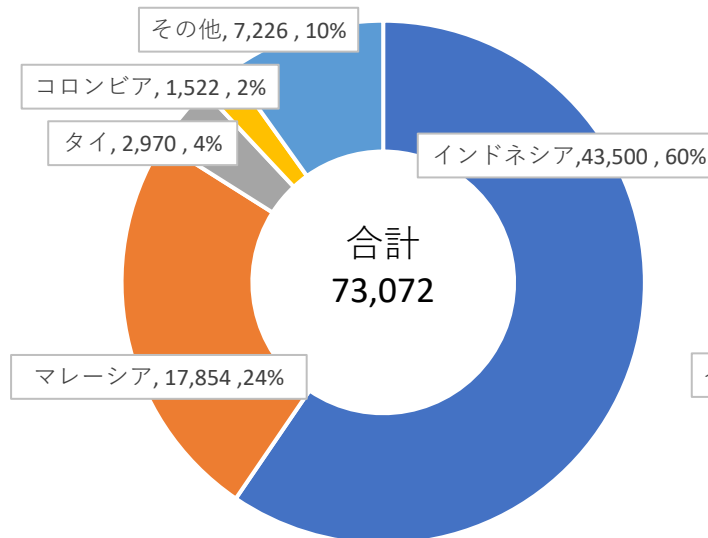
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



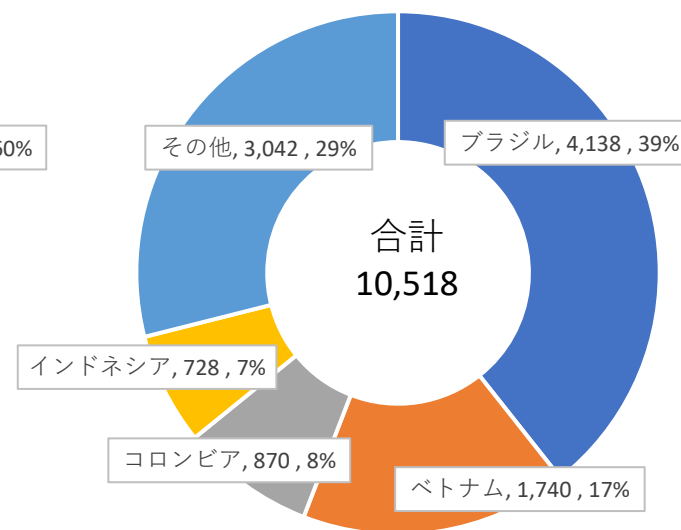
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
コーヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年4月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.1～134.8(前年同月比で－1.0%～36.5%) の範囲内。

消費者物価指数(総務省) (令和3年11月～令和4年4月)

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3		R4				
品目	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	99.7	100.0	103.2	107.1	107.2	108.0	8.9%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	101.0	98.5	100.4	100.9	100.9	100.1	-1.0%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	102.6	102.5	102.3	102.1	102.9	103.1	2.1%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	120.5	121.6	124.6	128.4	132.2	134.8	36.5%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	99.6	97.6	98.3	99.0	99.9	100.7	0.8%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	112.5	112.0	112.3	113.3	120.3	123.9	24.3%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	95.9	95.3	98.5	100.2	99.3	103.0	2.6%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.8	99.9	99.7	99.9	99.7	99.1	-0.8%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	101.0	100.9	101.2	101.5	101.9	102.4	2.6%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査(農林水産省) (令和3年11月～令和4年5月)

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3		R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	98.2	98.4	102.1	105.3	104.6	105.1	104.6	-0.5%	6.7%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	99.0	97.8	98.4	98.4	99.0	99.0	99.0	0.0%	-0.6%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	101.1	100.7	101.6	101.1	102.0	101.6	102.4	0.8%	3.0%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	115.3	116.3	119.1	122.9	126.4	129.6	130.8	0.9%	33.2%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	98.8	97.5	97.7	98.1	98.4	99.0	99.6	0.6%	0.2%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	106.6	105.6	105.9	105.9	112.1	117.2	117.2	0.0%	20.0%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	93.6	92.1	98.6	98.6	98.6	105.0	104.5	-0.5%	6.0%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.7	99.7	99.7	99.7	99.7	99.3	99.3	0.0%	-0.2%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日に海外の畜産物の需給動向を公表
（月報 畜産の情報）

○2022年6月号（5月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）2月の牛肉輸出量、日本、韓国向けは減少も中国向けが増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002183.html

（EU）牛飼養頭数の減少から22年の牛肉生産量は減少見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002190.html

（豪州）牛肉輸出量、近年にない低水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002191.html

（ブラジル）2021年の牛肉輸出量、7年ぶりに前年を下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002192.html

◆豚肉

（米国）飼養頭数の減少は今後も続く見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002193.html

（カナダ）食肉処理場の稼働率の低下により飼養頭数増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002194.html

（中国）豚飼養頭数減少も、生体豚価格はいまだ低水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002195.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）生乳取引価格、過去最高値を更新

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002196.html

（豪州）生乳生産量、9カ月連続で前年同月比減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002197.html

（NZ）2021/22年度の生乳生産量、前年度を下回る見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002199.html

◆飼料穀物

（世界）ブラジルなどの上方修正で、世界のトウモロコシ生産量は引き続き過去最高の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002200.html

（世界）南米での大豆減産見通しで、輸出と期末在庫は4カ月連続の下方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002225.html

（米国）トウモロコシ期末在庫率、引き続き9%台に据え置き

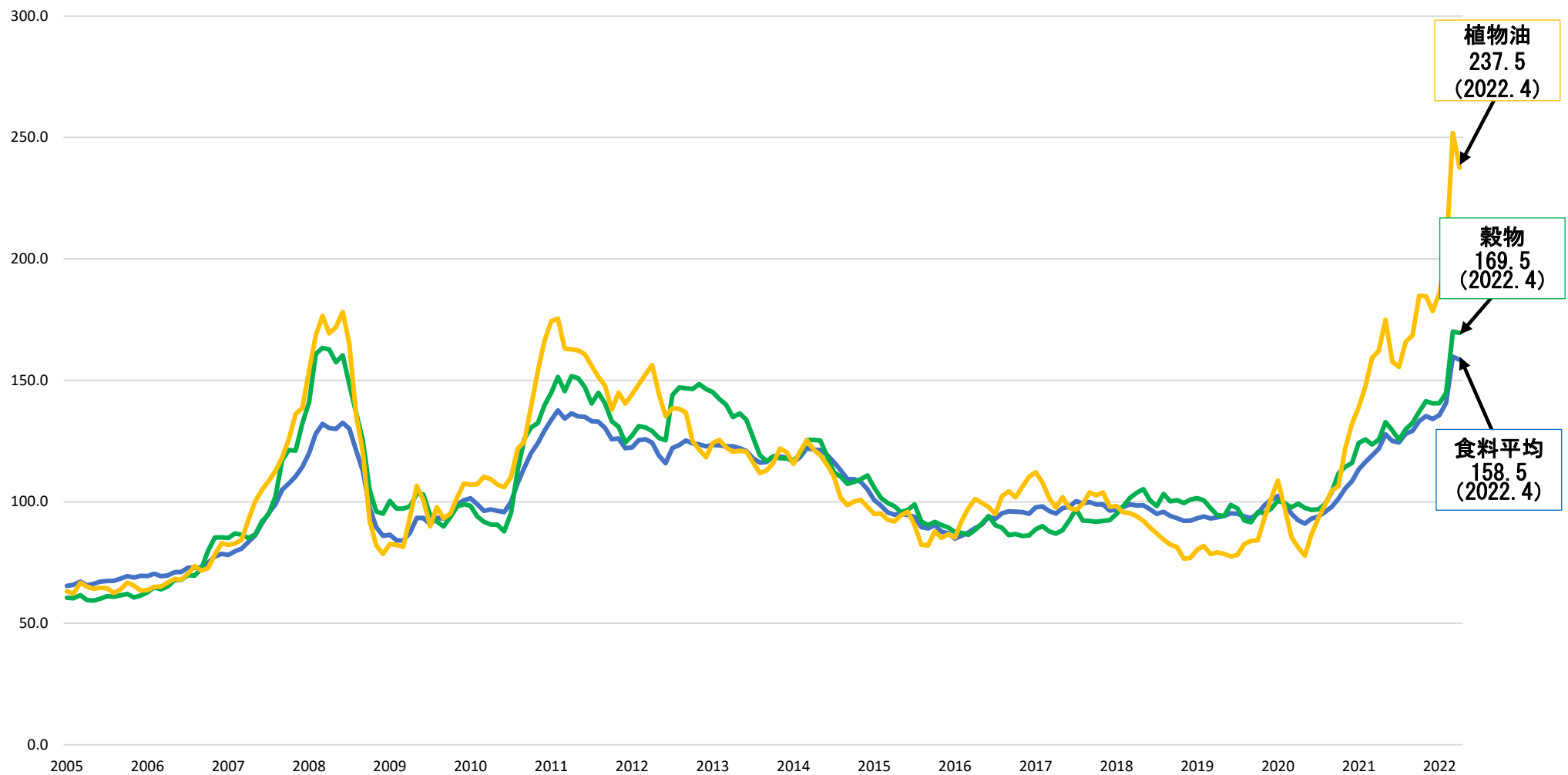
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002201.html

（中国）2021/22年度のトウモロコシ、大豆の需給見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002202.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.5)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

— 食料平均 — 穀物 — 植物油

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比  前月比 —

・カナダ、ロシア等で増加も、ウクライナ、豪州等で減少し、前年度を下回る見込み。

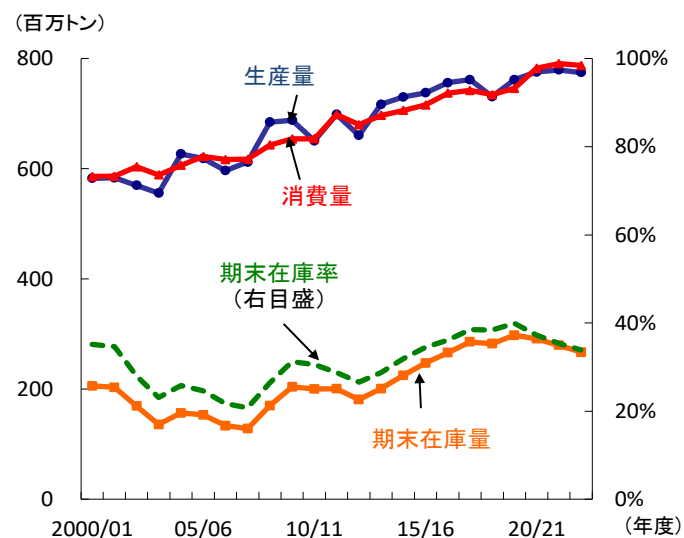
消費量 前年度比  前月比 —

・ウクライナ等で増加も、中国、インド等で減少し、前年度を下回る見込み。

輸出量 前年度比  前月比 —

・ウクライナ、豪州等で減少も、カナダ、ロシア等で増加し、前年度を上回る見込み。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 —



資料：USDA「PS&D」（2022. 5. 12）

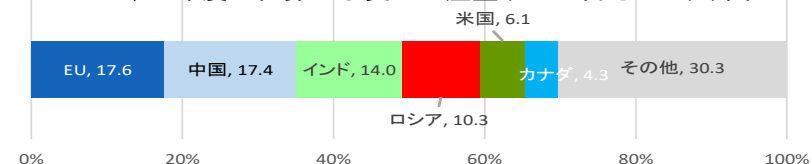
◎世界の小麦需給

（単位：百万トン）

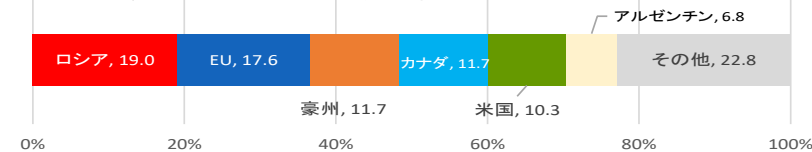
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	775.7	779.3	774.8	—	▲ 0.6
消 費 量	782.4	790.8	787.5	—	▲ 0.4
うち飼料用	158.0	161.0	153.5	—	▲ 4.7
輸 出 量	203.3	199.9	204.9	—	2.5
輸 入 量	195.4	196.5	201.3	—	2.4
期末在庫量	291.2	279.7	267.0	—	▲ 4.5
期末在庫率	37.2%	35.4%	33.9%	—	▲ 1.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 （12 May 2022）

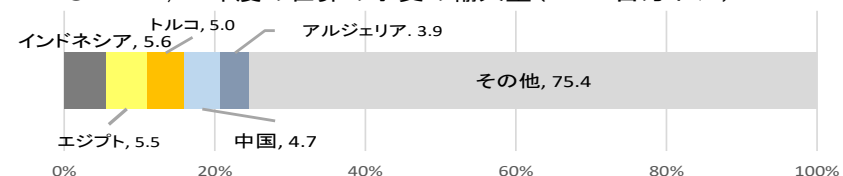
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(774.8百万トン)（単位：％）



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(204.9百万トン)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(201.3百万トン)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 冬小麦は減産も春小麦の回復から、生産量は前年度に比べ 5.0%増加

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、冬小麦は減少も、春小麦が前年度の干ばつによる減産から回復することから、前年度に比べ 5.0%増加の 47.1 百万トンとなる見込み。そのうち、冬小麦の実産量は、ここ 20 年で 2 番目に少ない 31.9 百万トン。品種別には、ハード・レッド・ウインター(HRW)が主産地の干ばつにより、前年度に比べ 21.3%減少の 16.1 百万トン、ソフト・レッド・ウインター(SRW)が同 2.0%減少の 9.6 百万トン、ハード・ホワイト・ウインター(HWW)が同 22.6 %減少の 0.4 百万トン、一方、ソフト・ホワイト・ウインター(SWW)は同 45%増加の 5.8 百万トン。また、春小麦は前年度に比べ 50.6%増加の 15.1 百万トン。

「Crop Progress」(2022.5.16)によれば、冬小麦の出穂進捗率は 48%と前年度同時期(51%)、5 年平均(53%)を下回っている。また、春小麦は、プレーンズ北部の雨がちな天候から、播種進捗率が 39%と前年同時期の 83%、5 年平均 67%を下回っている。また発芽進捗率も 16%と同 44%、30%を下回っている。冬小麦の作柄評価(良からやや良の割合)は、干ばつの影響から、27%と前年度同時期の 48%を下回っている。州別には、HRW の主要生産地であるカンザス州では、24%(同 54%)、オクラホマ州では 13%(同 59%)、テキサス州では 5% (同 25%) と前年度に比べ悪化している。

「U.S. Agriculture in Drought」(2022.5.12)によれば、干ばつ状況は 5 月 10 日現在、4 月よりわずかに改善したもの、HRW の主要生産地であるカンザス州の西部等を含め、冬小麦生産地の 68%が干ばつ状態となっている。また、デュラム小麦産地は、76%が干ばつ状態となっている一方、春小麦は、生産地の 35%が干ばつ状態である。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、輸出余力の減少と価格上昇に伴う競争力の低下から、前年度に比べ 3.7%減少し、1972/73 年度以降最低の 21.1 百万トンの見込み。一方、2021/22 年度の実輸出量は、輸出が好調のため、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、21.9 百万トン。

2022/23 年度の期末在庫量は 6 年連続で減少し、前年度に比べ、5.5%減少の 16.8 百万トンの見込み。この減少で農家売渡し平均価格は史上最高の 10.75 ドル/bu に上昇した。

小麦一米国 (冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.8	44.8	47.1	—	5.0
消費量	30.5	30.7	30.2	—	▲ 1.4
うち飼料用	2.6	2.7	2.2	—	▲ 19.9
輸 出 量	27.0	21.9	21.1	—	▲ 3.7
輸 入 量	2.7	2.7	3.3	—	20.2
期末在庫量	23.0	17.8	16.8	—	▲ 5.5
期末在庫率	40.0%	33.9%	32.8%	—	▲ 1.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	14.89	15.04	15.00	—	▲ 0.3
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.14	—	5.4

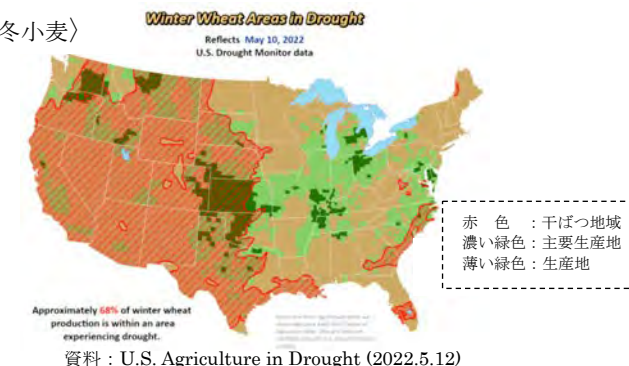
資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)

図 米国の干ばつ状況(2022 年 5 月 10 日時点)

〈春小麦〉



〈冬小麦〉



資料: U.S. Agriculture in Drought (2022.5.12)

＜ カナダ ＞ 干ばつ被害から回復し、生産量は前年度に比べ 45.9%増加

【生育・生産状況】カナダ統計局「Principi field crop areas ,March 2022」(2022.4.26)によれば、2022/23 年度の播種面積は、前年度に比べ、菜種、大麦等が減少し、小麦は増加する見込み。小麦全体の播種面積は、前年度に比べ 7.2%増加の 10.12 百万ヘクタールの見込み。そのうち、デュラム小麦は同 12.5%増加の 2.51 百万ヘクタール、春小麦は同 7.0%増加の 7.12 百万ヘクタール、冬小麦は同 13.0%減少の 0.49 百万ヘクタールの見込み。州別にはサスカチュワン州が、前年度に比べ 10.6%増加の 5.38 百万ヘクタール、アルバータ州では、同 6.3%増加の 3.00 百万ヘクタール、マニトバ州では、同 5.7%増加の 1.25 百万ヘクタール。

カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook For Principal Field Crops」(2022.5.20)によれば、生産量は、播種面積と単収(例年の水準を仮定)の増加から、カナダ西部で干ばつの被害があった前年度に比べ、45.9%増加の 31.6 百万トンの見込み。そのうち、デュラム小麦は、前年度に比べ、13.9%増加の 5.7 百万トン、普通小麦は同 37.2%増加の 25.9 百万トン。生育状況は、プレーリー(小麦生産地の平原三州)の南東部では土壤水分過多となり、一部低地で洪水が発生し、播種が遅延している。また、同南西部では干ばつが継続しているものの、西部の大部分では播種は例年のペースで進んでいる。

平原三州の各州政府によれば、サスカチュワン州では、十分な土壤水分量と土壤温度となっている圃場で乾燥天候に恵まれ播種作業が進展したものの、5月9日時点で春穀物の播種進捗率は14%と5年平均の23%を下回っている。また、アルバータ州では、5月10日時点で20%と平年を2ポイント下回った。マニトバ州では、5月10日時点で、作付け進捗率は1%と5年平均の21%を大きく下回った。

【貿易情報・その他】AAFCによれば、2022/23 年度の輸出量は、前年度に比べ 43.1%増加の 21.9 百万トン。そのうち、デュラム小麦は天候不順で収穫量の減少した北アフリカからの輸入需要増加から、前年度に比べ、91.3%増加の 4.4 百万トン、普通小麦は前年度に比べ 34.6%増加の 17.5 百万トン。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022 年 3 月の輸出量は普通小麦が 0.8 百万トン、デュラム小麦は 0.2 百万トンの計 1.0 百万トンで、輸出先国は、普通小麦はインドネシア(13.3%)、日本(13.2%)、アラブ首長国連邦(11.4%)、デュラム小麦は、モロッコ(35.6%)、日本(19.4%)の順。

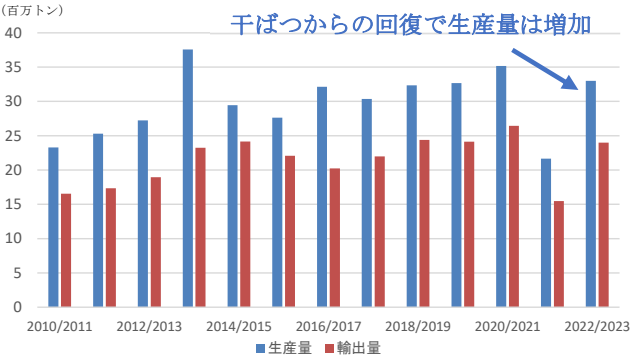
小麦－カナダ(春小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	35.2	21.7	33.0 (31.6)	—	52.4
消費量	9.1	9.5	9.1 (8.4)	—	▲ 4.2
うち飼料用	4.2	4.5	4.0 (4.0)	—	▲ 11.1
輸出量	26.4	15.5	24.0 (21.9)	—	54.8
輸入量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	—	—
期末在庫量	5.7	2.9	3.4 (5.0)	—	17.1
期末在庫率	15.9%	11.7%	10.3% (16.5%)	—	▲ 1.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.25	9.70 (10.00)	—	4.9
単収(t/ha)	3.51	2.34	3.40 (3.16)	—	45.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(20 May 2022)

図 カナダ産小麦の生産量、輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.5.12)をもとに農林水産省で作成

表 カナダ産普通小麦及びデュラム小麦の輸出先国(2022年3月)

＜普通小麦＞			＜デュラム小麦＞		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
インドネシア	10.6	13.3	モロッコ	5.7	35.6
日本	10.5	13.2	日本	3.1	19.4
アラブ首長国連邦	9.1	11.4	アルジェリア	2.5	15.6
コロンビア	8.8	11.0	米国	2.2	13.8
エクアドル	6.9	8.7	ペルー	1.8	11.3
その他	33.8	42.4	その他	0.7	4.4
	79.7	100.0	計	16.0	100.0

注1: Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。
注2 普通小麦の: 品種はNo.1-3 Canada Western Red Spring, No.2 Canada Prairie Spring, No.1 Canada Western Red winter, No.2 Canada Eastern, Other, デュラムはCanada Western Amber Durum Others
資料: Canadian Grain Commission 「Export of Canadian Grain and Wheat Flour」 (2022年4月25日) をもとに作成。

< 豪州 > 生産量は史上最高の前年度を 17.4%下回る

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、史上最高となった前年度に比べ 17.4%減少し、30.0 百万トンとなるものの、10 年平均(24.9 百万トン)を上回る見込み。豪州は 2 年連続の豊作となったものの、2022/23 年度は前年度に比べ、単収、収穫面積が減少する見込み。収穫面積の減少の主な理由は、肥料、燃料の価格高騰と一部での供給不足である。

豪州では、降雨に恵まれ出芽と発芽が進んでいる。豪州東部では、初期生育期の小麦は降雨に恵まれたものの、降雨で遅播きの播種は遅延した。また、同南部では、ほぼ好天に恵まれ、生長が促進されるとともに、遅蒔きの播種が進展した。

GIWA (西オーストラリア州穀物団体) (2022.5.13)によれば、西豪州の実産地は昨秋の降雨により十分な土壌水分となったことから、播種が順調に開始された。5 月 13 日時点では、小麦の播種面積は 2021/22 年度並みの、4.95 百万ヘクタールとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、生産量が減少することから、前年度に比べ 12.7%減少するものの、史上第 3 番目となる 24.0 百万トンの見込み。豪州産は、特に、東南アジア市場からの強い需要がある。また、2021/22 年度の実輸出量は、史上最高の生産量や、他の主要輸出国に比べ価格競争力があることから、前月予測からの変更はなく、27.5 百万トンと史上最高となる見込み。なお、5 月 11 日時点の豪州の実輸出価格(FOB)は、インドとの競争から、4 月 6 日時点の 431 ドル/トンから 14 ドル/トン低下し、417 ドル/トン。

豪州統計局によれば、2022 年 3 月の実輸出量は、前月(2.83 百万トン)に比べ 2.61 百万トンと減少した。同月の輸出先国は、中国(17%)、フィリピン(14%)の順。また、2022 年 1 月から 2022 年 3 月までの実輸出量は 8.1 百万トン。輸出先国は、中国(17.9%)、インドネシア(13.8%)、フィリピン(12.5%)、ベトナム(9.8%)の順で、それらの国の実輸出量の合計は全体の 54%を占める。

なお、2021/22 年度に豪州産小麦に加え大麦、菜種が史上最高となったこと、その輸出時期が集中すること、北米産小麦の減産、ロシアのウクライナ侵攻による需要の集中から、輸出スロットの確保が難しい状況となっている。そのため、物流の遅延や混乱、輸入国の穀物輸入コストの増加が生じている。

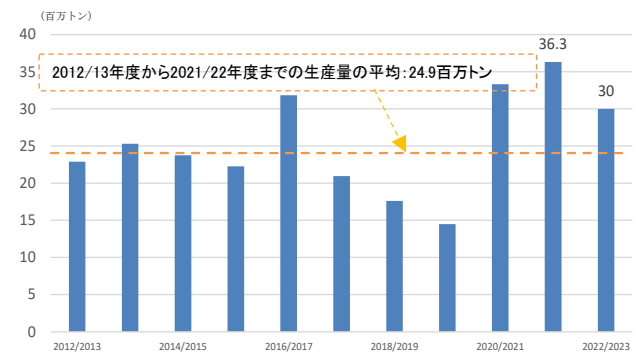
小麦－豪州 (冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	33.3	36.3	30.0 (27.8)	—	▲ 17.4
消 費 量	8.0	8.5	7.6 (8.7)	—	▲ 11.2
うち飼料用	4.5	5.0	4.0 (5.0)	—	▲ 20.0
輸 出 量	23.9	27.5	24.0 (22.5)	—	▲ 12.7
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.4)	—	—
期末在庫量	4.3	4.8	3.5 (3.4)	—	▲ 28.0
期末在庫率	13.6%	13.4%	11.0% (10.9%)	—	▲ 2.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)※	12.90	13.00	12.90 (13.04)	—	▲ 0.8
単収(t/ha)	2.58	2.79	2.33 (2.79)	—	▲ 16.5

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022)

図 豪州産小麦の実産量の推移



資料: USDA 「PS&D」(2022.5.12)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦輸出先国別輸出量

2022年3月			2022年1月～3月		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	累積輸出量(万トン)	シェア(%)
中国	44.1	16.9	中国	145.1	17.9
フィリピン	36.6	14.0	インドネシア	111.5	13.8
インドネシア	29.8	11.4	フィリピン	101.5	12.5
ベトナム	29.4	11.3	ベトナム	79.6	9.8
韓国	27.1	10.3	韓国	53.4	6.6
その他	94.6	36.2	その他	319.0	39.4
合計	261.6	100.0	合計	810.2	100.0

資料: 豪州統計局のデータをもとに農林水産省で加工

< EU27+英国 >主要生産国のフランスの生産量は前年度に比べ減少

【生育・生産状況】欧州委員会によれば、EU27の2022/23年度の生産量は、前年度に比べ、0.1百万トン減少し138.7百万トンの見込み。そのうち、普通小麦はフランス等で減少したものの、ハンガリー、ドイツ等で増加したことから、前年度に比べ0.05百万トン増加し131.1百万トンの見込み。フランスは、単収は増加したものの作付面積が減少することから、生産量は前年度に比べ、3.9%減少の34.1百万トンの見込み。また、デュラム小麦はドイツ等で減少したものの、フランス、イタリアで増加したことから同0.2百万トン減少の7.6百万トンの見込み。

USDAによれば、英国は、前年度に比べ、0.4百万トン増加し14.4百万トン。

USDAによれば、2022/23年度のヨーロッパ全体の冬小麦の生育状況は、前年秋の播種以降、冬枯れもほとんどなく土壌水分も十分な状況であり良好。一方、英国、フランス、ドイツ北部では、小雨はあったものの、今後、乾燥が続くと見られ、生殖生長期にある小麦への影響懸念が高まっている。そのため、5月の降雨が必要とされている。イベリア半島では冬期及び春期の降雨で生長は良好であり、スペインでは、好天に恵まれたが高温となったため、生殖生長期から成熟期にかけての小麦の生長が早まった。また、欧州南部では温暖で、生殖生長期にある冬穀物の生長が促進された。

フランスアグリメール(2022.5.2)によれば、フランス産普通小麦、デュラム小麦とも出穂期に入ったが、前年度に比べると普通小麦の生育は早い、デュラム小麦は遅れている。同16日付けのフランス産の生育状況を示す「とても良い～良い」の割合は、乾燥天候の影響で、前週の83%から72%に低下し、前年度同時期の79%を下回った。今後の乾燥天候による作柄への影響が懸念されている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度のEU27の輸出量は、前年度に比べ、16.4%増加の36.9百万トンとなり、世界第2位となる見込み。フランス、ルーマニア、ドイツの豊作による輸出余力の増加や、減少したウクライナの輸出の代替として、サブサハラアフリカや中東から需要が高まっていることが輸出量増加の要因である。

なお、フランスアグリメール(2022.5.2)によれば、2021/22年度のフランス産普通小麦の輸出量は前月予測(9.5百万トン)から9.3百万トンに下方修正された。これは、中国のコロナウイルス封じ込め政策に伴う輸入量の減少と、小麦価格の高止まりが要因である。

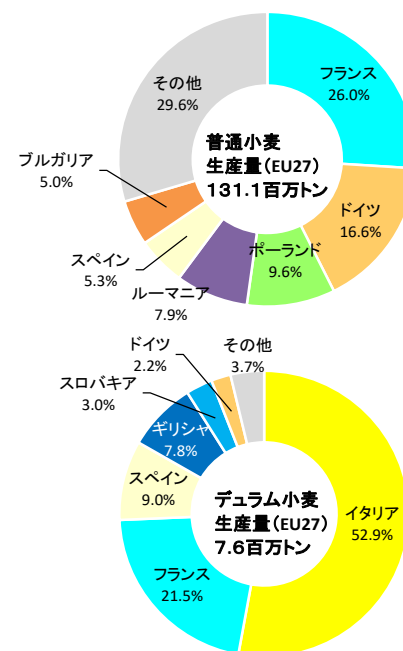
小麦－EU27+英国（冬小麦を主に栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	136.4	152.4	150.9 (150.1)	—	▲ 1.0
消費量	118.2	124.3	124.2 (119.9)	—	▲ 0.1
うち飼料用	48.5	53.4	52.2 (46.8)	—	▲ 2.2
輸 出 量	30.2	31.7	36.9 (38.6)	—	▲ 16.4
輸 入 量	8.6	6.8	7.0 (6.9)	—	▲ 2.9
期末在庫量	12.1	15.3	12.1 (13.9)	—	▲ 20.9
期末在庫率	8.2%	9.8%	7.5% (8.8%)	—	▲ 2.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	24.37	26.02	25.90 (25.55)	—	▲ 0.5
単収(t/ha)	5.59	5.86	5.83 (5.87)	—	▲ 0.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
USDA 「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022)
※表内のデータはEU27+英国

図 2022/23 年度 EU27 の普通小麦、デュラム小麦の国別生産量割合



資料：欧州委員会「EU Cereals Production, Area, and Yield」(2022. 4. 28)をもとに農林水産省で作成

< 中国 > 小麦生産量は前年度に比べ0.1%減少の136.9百万トン

【生育・生産状況】中国糧油情報センター(2022.5.7)によれば、2022/23年度の生産量は、前年度に比べ0.1%減少の136.9百万トンの見込み。

作期別には、冬小麦は131.4百万トン(対前年度比0.1%減)、春小麦は5.5百万トン(同0.1%増)。なお、省別の生産量のシェアは、冬小麦が、河南省(28.8%)、山東省(20.0%)、安徽省(12.6%)、河北省(10.9%)。一方、春小麦は冬小麦に比べ少ないものの、新疆地区、内モンゴル地区で生産されている。

2022/23年度の冬小麦の生育条件は、日照は平年並みで、多くの地域で土壌水分は十分であったものの、河南中北部と東部、山東省南部では降雨が少なく、土壌水分は不十分となった。また、中国中央気象台(5月8日)によれば冬小麦の生育段階は、華東地域の山東省で出穂期から開花期、安徽省等で開花期から乳熟期、華中地域の河南省で開花期、湖北省で乳熟期を迎えている。一方、春小麦は、全国の播種進捗率が80%を超えている。

なお、中国糧油情報センターによれば、前年度の秋の洪水により冬小麦の播種に遅れが発生したが、休眠期後の良好な天候と中央政府及び各地方政府の生産安定措置により、冬小麦の作柄は改善しつつある。全国の冬小麦の一、二類苗の比率は92.5%と、前年度同時期に比べ2.5ポイント低いものの、前月に比べ、6.7ポイント向上した。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、小麦輸入量は前年度(8.3百万トン)から6.0%減少し、7.8百万トンの見込み。中国海関統計によれば、2022年3月の小麦輸入量は、前年度同期(43.9万トン)を96.1%上回る86.1万トン。その要因は、春節シーズンのずれの影響で、2月は逆に輸入量が前年度を大きく下回った。2022年1月から3月の輸入量は、同(291.2万トン)を4.3%上回る303.6万トン。輸入先国は、豪州(52.5%)、フランス(37.5%)の順。なお、2022年1月から3月までの米国からの輸入量は446トンと前年度同時期(46.3万トン)に比べ大幅に減少している。また、ロシアからの輸入量は同0.1万トンと前年度同時期(0.2万トン)に比べ減少した。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年3月号」によれば、国内卸売価格は、2月末のロシアのウクライナ侵攻による国際小麦価格の急騰から、3月初めに国内小麦価格が大幅上昇。加えて、石油価格上昇による物流費の上昇で小麦粉加工業者の仕入れ価格が上昇し、全体的に前月に比べ大幅上昇。

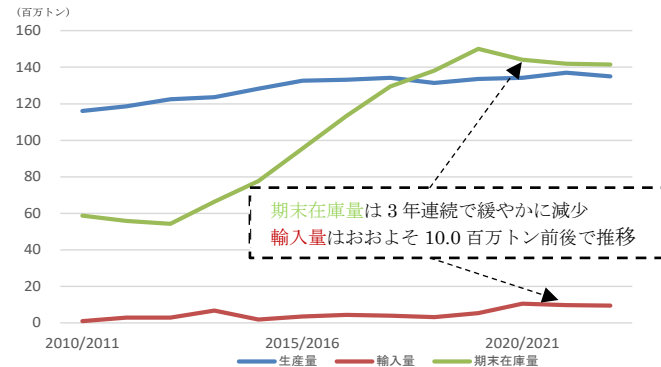
小麦—中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	134.3	137.0	135.0 (135.0)	—	▲ 1.4
消 費 量	150.0	148.0	144.0 (141.0)	—	▲ 2.7
うち飼料用	40.0	35.0	30.0 (26.5)	—	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.0)	—	5.9
輸 入 量	10.6	9.7	9.5 (9.4)	—	▲ 2.1
期末在庫量	144.1	141.9	141.5 (135.4)	—	▲ 0.3
期末在庫率	95.6%	95.3%	97.7% (95.3%)	—	2.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.40 (23.50)	—	▲ 0.7
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.77 (5.74)	—	▲ 0.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022)

図 中国産小麦の生産量、輸入量、期末在庫量の推移



資料: USDA「PS&D」(2022. 5. 12)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦輸入先国(2022年3月、2022年1月～2022年3月、2021年1月～2021年3月)

(輸出量:百万トン、シェア%)

2022年3月			2022年1月～2022年3月			2021年1月～2021年3月		
国 名	輸出量	輸出シェア	国 名	輸出量	輸出シェア	国 名	輸出量	輸出シェア
豪州	44.8	52.1	豪州	159.4	52.5	豪州	96.6	33.2
フランス	27.0	31.4	フランス	113.8	37.5	カナダ	77.2	26.5
カナダ	14.0	16.3	カナダ	29.6	9.8	フランス	58.6	20.1
ロシア	0.1	0.2	カザフスタン	0.5	0.2	米国	46.3	15.9
カザフスタン	0.1	0.1	ロシア	0.1	0.0	小アジア	6.6	2.3
その他	0.0	0.0	その他	0.0	0.0	その他	6.0	2.1
計	86.1	100	計	303.6	100	計	291.2	100

資料: 中国海関統計(2022.4.20)をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 小麦輸出量は世界第1位

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前年度に比べ6.4%増加し、過去3番目に高い80.0百万トンの見込み。この増加は、収穫面積が前年度に比べ0.5%減少し、27.5百万ヘクタール(過去5年平均と同水準)となるものの、単収が同7%増加し2.91トン/ヘクタール(5年平均を2%上回る)となるためである。作期別の生産量は、冬小麦は58.5百万トン、春小麦は21.5百万トンの見込み。2022/23年度の冬小麦は、越冬期に地表が氷に覆われたため、越冬条件が良好で枯死が少なかった上に、越冬後の4月も十分な土壌水分に恵まれた。

なお、プーチン大統領は5月12日、2022/23年度の穀物生産量(クリミア地域を含む)は130.0百万トン、そのうち小麦は87.0百万トンになる可能性があると述べた。

2022/23年度の生育状況は、ロシアヨーロッパ部の北部(中央連邦管区等)では冬作物はおおむね例年並みで、4月20日までに越冬が終わり、再生長が始まった。また、4月上旬から春作物の播種が開始された。また、南部(南連邦管区等)では、冬作物は3月末までに越冬は終了し、4月は生長が進んだ。春作物は、南部から開始されていた播種が全域に広がった。

ロシア農業省の速報値によれば、春小麦の播種面積は、5月13日時点で4.34百万ヘクタール、播種進捗率は33%である。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前年度に比べ18.2%増加の39.0百万トンの見込み。輸出量の増加は、生産量の増加と輸出競合国であるウクライナがロシアによる侵攻で輸出量を減らすこと、比較的安価な黒海産小麦への世界の需要の強さが要因である。

また、ロシア産の輸出価格(FOB)は、経済制裁による決済での問題にもかかわらず輸出が継続しているため、前月(4月6日)から4ドル/トン上昇し、5月11日時点で399ドル/トンとなった。

現地情報会社によれば、4月の小麦輸出量は前年同期比69%増加し、平年並みの2.6百万トン。ロシア産は中近東、北アフリカ諸国に輸出されており、2022年4月の主な輸出先は、トルコ(38.2%)、イラン(25.1%)、エジプト(20.6%)の順。また、輸出量は、輸出数量制限が撤廃される7月以降に急増すると見られている。なお、対ロ制裁を科していないアルジェリア、エジプト、トルコ等は安定的にロシア産穀物の買付けを継続していると見られる。

小麦ーロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)
(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	85.4	75.2	80.0 (82.5)	—	6.4
消 費 量	42.5	41.8	42.3 (44.3)	—	1.2
うち飼料用	19.0	18.5	19.0 (19.4)	—	2.7
輸 出 量	39.1	33.0	39.0 (34.3)	—	18.2
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	—	—
期末在庫量	11.4	12.1	11.1 (15.9)	—	▲ 7.9
期末在庫率	13.9%	16.2%	13.7% (20.3%)	—	▲ 2.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	27.50 (27.95)	—	▲ 0.5
単収(t/ha)	2.98	2.72	2.91 (2.95)	—	7.0

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022)

図 ロシア産小麦の生産量、輸出量の推移

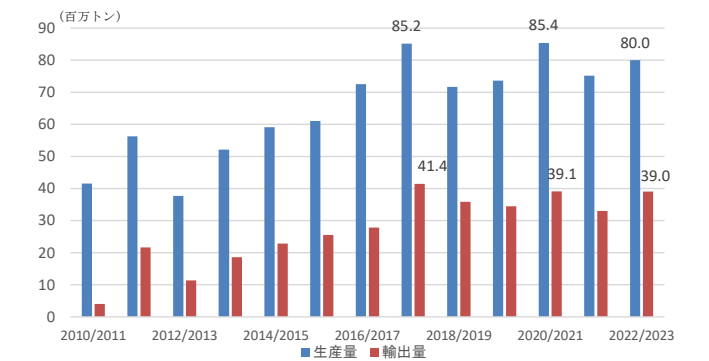


表 ロシアの小麦輸出先国

2022年4月			2021年7月～2022年4月		
国 名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)
トルコ	99.9	38.2	イラン	601.4	23.0
イラン	65.6	25.1	トルコ	566.5	21.7
エジプト	53.9	20.6	エジプト	462.7	17.7
アゼルバイジャン	0.9	0.3	アゼルバイジャン	89.0	3.4
イスラエル	0.8	0.3	サウジアラビア	71.5	2.7
その他	40.5	15.5	その他	822.9	31.5
計	261.6	100.0	計	2614	100.0

資料:ロシア税関統計をもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ ロシアの侵攻により小麦の輸出量は前年度に比べ47.4%減少

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、ロシアのウクライナへの侵攻による収穫面積(対前年度比21.1%減)と単収(同17.3%減)の減少から、史上最高だった前年度に比べ34.9%減少し、21.5百万トンの見込み(過去5年平均より23%減)。

ウクライナ国家統計局によれば、2022/23年度の主要作の冬小麦の播種面積は前年度に比べ2.5%減少の6.54百万ヘクタール(クリミア及びドネツク州、ルガンスク州を含まず、現在の紛争地域のデータを含む)。一方、早期春穀物は5月12日時点で予定面積の約90%の播種が完了。そのうち、春小麦の播種面積は他の作物からのシフト等から前年度同時期に比べ増加し、18.75万ヘクタール(予定面積:18.96万ヘクタール)。また、同省によれば、紛争地域の農地破壊、耕作放棄面積(爆撃や地雷埋設等により農地に適さない土地や人手不足で放置される土地)は、全体の30%程度。

2022/23 年度の小麦の生育状況(4月末現在)は、冬小麦が分げつ期から茎立期の初期、春小麦が出芽期~根茎形成期で、播種が早かった圃場ではすでに子葉形成期に入った。また、北部から西部の一部地域では播種作業が継続している。なお、2022/23 年度は、肥料価格の高騰や、黒海の主要港の閉鎖による供給網の混乱から、施肥量が減少し、さらに収穫量が落ちる可能性がある。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、黒海の港湾がロシアの侵攻により閉鎖されたことや、生産量の減少により、前年度に比べ47.4%減少の10.0百万トンの見込み。

なお、海上輸送の代替として、鉄道利用による近隣ヨーロッパ諸国を通じての輸出方法が検討されている。フランスアグリメール(2022.5.11)によれば、陸路でポーランドへ運び、その後、ポーランド、ラトビア、リトアニアのバルト海沿岸からの輸出が想定されている。しかし、欧州委員会によれば、鉄道輸送には、レール幅の違いによる積み荷の詰替えが必要なこと、積替地での積替能力が小さい等の問題がある。また、ドナウ川経由の代替ルートは、港湾能力の問題から輸出ニーズのごく一部の対応に留まり、加えて、ロシア軍影響下の黒海北部の運行になるためリスクが高い。

ウクライナ農業政策食料省によれば、2022年3月及び4月の輸出実績は侵攻前に比べ大幅に減少し、それぞれ3.3万トン(港湾98%)、0.9万トン(同81%)。2021年7月から2022年2月の小麦輸出量は18.1百万トンで、輸出先国はエジプト(15.1%)、インドネシア(14.7%)、トルコ(9.9%)等の順。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	25.4	33.0	21.5 (19.4)	—	▲ 34.9
消費量	8.7	10.0	11.2 (8.7)	—	12.0
うち飼料用	2.6	4.0	6.0 (2.8)	—	50.0
輸 出 量	16.9	19.0	10.0 (11.0)	—	▲ 47.4
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	—	—
期末在庫量	1.5	5.6	6.0 (6.4)	—	7.1
期末在庫率	5.9%	19.3%	28.3% (32.6%)	—	9.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.85 (5.03)	—	▲ 21.1
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.68 (3.86)	—	▲ 17.3

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022)

図 ウクライナ産冬小麦の生産地域と紛争地域



資料: USDA「World Agricultural Production」(2022.5.12)

表 ウクライナ小麦輸出先国 (2022年2月、2021年7月～2022年2月)

2022年2月			2021年7月～2022年2月		
国 名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)
エジプト	23.1	22.2	エジプト	273.8	15.1
トルコ	18.3	17.6	インドネシア	265.5	14.7
パキスタン	10.6	10.2	トルコ	178.7	9.9
イエメン	8.7	8.4	パキスタン	146.9	8.1
アルジェリア	7.7	7.4	サウジアラビア	75.1	4.1
その他	35.6	34.2	その他	871.3	48.1
計	104.0	100.0	計	1,811.3	100.0

資料: ウクライナ税関統計をもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比  前月比 **—**

・ブラジル、アルゼンチン等で増加も、ウクライナ、米国、EU 等で減少し、前年度を下回る見込み。

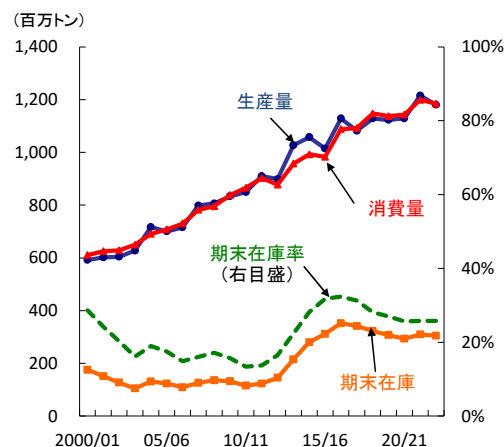
消費量 前年度比  前月比 **—**

・中国、ブラジル等で増加も、米国、ウクライナ等で減少し、前年度を下回る見込み。

輸出量 前年度比  前月比 **—**

・ブラジル、アルゼンチン等で増加も、ウクライナ、米国等で減少し、前年度を下回る見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 **—**



資料：USDA「PS&D」（2022. 5. 12）をもとに農林水産省にて作成

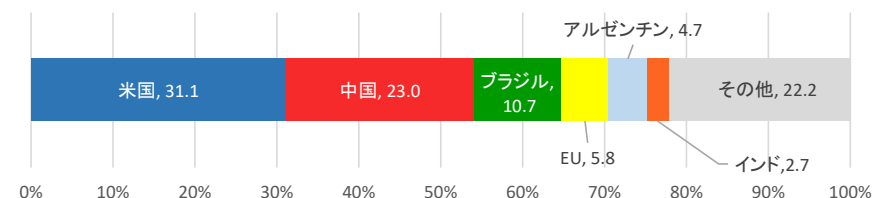
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

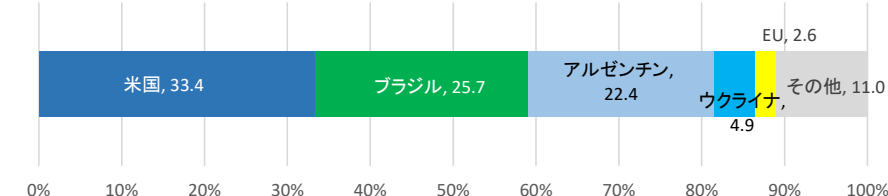
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,129.0	1,215.6	1,180.7	—	▲ 2.9
消 費 量	1,143.3	1,199.4	1,185.0	—	▲ 1.2
うち飼料用	723.7	750.0	746.6	—	▲ 0.4
輸 出 量	183.0	197.8	182.7	—	▲ 7.6
輸 入 量	185.6	181.0	176.8	—	▲ 2.3
期末在庫量	293.2	309.4	305.1	—	▲ 1.4
期末在庫率	25.6%	25.8%	25.8%	—	▲ 0.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 May 2022)

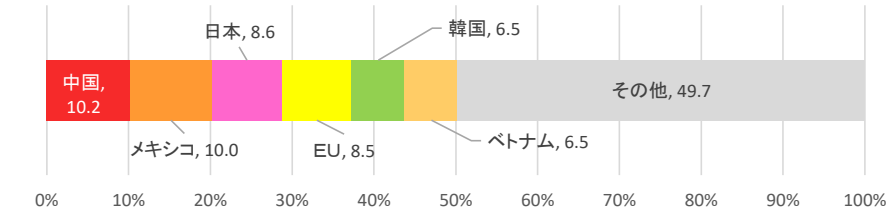
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,180.7百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(182.7百万トン)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(176.8百万トン)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は主に収穫面積減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、肥料価格高騰の影響による中西部の主要生産州（アイオワ州、イリノイ州、ネブラスカ州等）での収穫面積の減少に加え、中西部の主要生産州で5月中旬まで作付けのペースが平年よりかなり遅れたことから2月のアウトルック・フォーラムでの予想単収から下方修正され、前年度より4.3%減の367.3百万トンの見込み。

USDA「Crop Progress」（2022.5.16）によれば、5月上旬までの中西部の低温で雨がちな天候により、主要18州における作付け進捗率は49%と、前年度同期（78%）及び過去5年平均（67%）より大幅に遅れている。発芽率も14%と前年度同期（38%）及び過去5年平均（32%）より遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、エタノール用需要が米国内のガソリン需要が前年度に比べ横ばいと予想から前年度と変更がない一方、飼料用需要が生産量の減少、国内価格の上昇等から減少することから、前年度より2.2%減の309.0百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の減少に加えて、世界的な価格高騰による多くの国での需要の抑制、一定の国内需要があること等から、前年度より4.0%減の61.0百万トンの見込み。

USDAによれば、2022年輸出検証高（2022年1月6日～5月5日）は、24.8百万トンであり、内訳は中国（6.9百万トン）、メキシコ（5.6百万トン）、日本（4.7百万トン）、コロンビア（2.0百万トン）の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前年度より5.6%減の34.5百万トンの見込み。なお、期末在庫率は9.3%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	358.5	383.9	367.3	—	▲ 4.3
消費量	306.5	315.9	309.0	—	▲ 2.2
うち飼料用	142.2	142.9	135.9	—	▲ 4.9
エタノール用等	127.8	136.5	136.5	—	—
輸 出 量	69.9	63.5	61.0	—	▲ 4.0
輸 入 量	0.6	0.6	0.6	—	—
期末在庫量	31.4	36.6	34.5	—	▲ 5.6
期末在庫率	8.3%	9.6%	9.3%	—	▲ 0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.31	34.56	33.06	—	▲ 4.3
単収(t/ha)	10.76	11.11	11.11	—	—

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 May 2022）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

< ブラジル > 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2022/23 年度の実生産量は、収穫面積及び単収の増加により、前年度より 8.6%増の 126.0 百万トンとなり、史上最高の見込み。

なお、ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2022.5.12）によれば、2021/22 年度の実収穫終盤の夏とうもろこしの生産量は、2020/21 年度比 0.2%減の 24.7 百万トンの見込み。

一方、生育期を迎えた冬とうもろこしの生産量は、マット・グロッソ州など中西部の主産地では乾燥が続く一方、南部産地ではおおむね良好な天候に恵まれ、干ばつ・霜害の影響で大幅減産となった 2020/21 年度に比べ 44.2%増の 89.9 百万トンの見込み。

夏作・冬作の合計では 2020/21 年度比 31.6%増の 114.6 百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照）。

南部のパラナ州で 5 月 9 日現在、夏とうもろこしの収穫は終了。同州では冬とうもろこしの 85%が生殖生長段階に入っている。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で 5 月 12 日現在、夏とうもろこしの収穫進捗率は 86%。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の実消費量は、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 5.5%増の 77.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、生産量の増加に伴い、前年度より 5.6%増の 47.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1～4 月の輸出量は 4.2 百万トンで、前年同期（3.5 百万トン）と比べ 18.7%増となっている。内訳は、1 位がエジプト 101 万トン、2 位がイラン 86 万トン、3 位が韓国 58 万トン。4 月の輸出量は 69 万トンで、前年同月（13 万トン）と比べ、5.3 倍。ロシアのウクライナ侵攻の影響により、ウクライナ産の市場シェアが低下したことで、ブラジル産の中東向け輸出が増加した。なお、5 月 23 日、ブラジル農務省は中国政府とブラジル産とうもろこしについて検疫問題をクリアし対中輸出の合意に至ったと公表した。

とうもろこしーブラジル

（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが3/4を占め、夏とうもろこしは1/4）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	87.0	116.0	126.0 (123.1)	—	8.6
消 費 量	70.0	73.0	77.0 (78.6)	—	5.5
うち飼料用	59.5	62.0	65.5 (56.5)	—	5.6
輸 出 量	21.0	44.5	47.0 (43.6)	—	5.6
輸 入 量	2.9	2.0	1.3 (0.5)	—	▲ 35.0
期末在庫量	4.2	4.7	8.0 (8.4)	—	71.0
期末在庫率	4.6%	4.0%	6.4% (6.9%)	—	2.5

（参考）

収穫面積(百万ha)

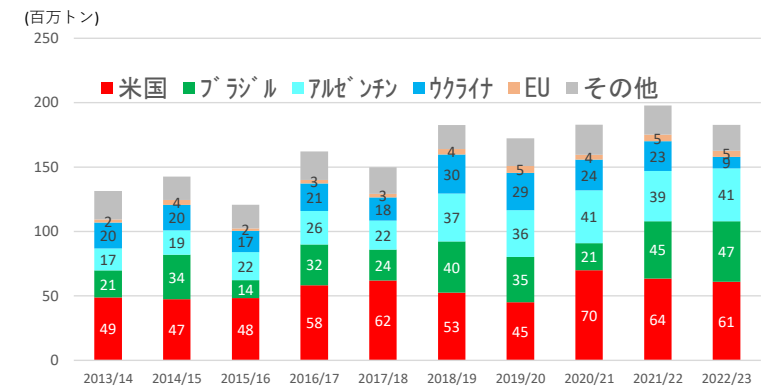
単収(t/ha)

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(12 May 2022)

IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2022. 5. 12) のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2022/23 年度
の生産量は、単収の増加により、前年度より 3.8%増の 55.0 百万トンと史上最高の見込
み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.5.19）によれば、2021/22 年度の収穫進捗
率は 27%で、中央部と南部で進展しているものの、大豆の収穫作業を優先させている
ため過去 5 年平均より 9 ポイント遅れている。作柄は良からやや良が 77%と前週
(76%) からわずかに改善している。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、飼料用消費の増加に伴い、前
年度より 2.2%増の 14.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量の増加に伴い、
前年度より 5.1%増の 41.0 百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1～3 月の輸出量は 6.8 百万トンで、前年
同期（5.7 百万トン）より 20.0%増。内訳は、1 位がベトナム 84 万トン、2 位がペルー
79 万トン、3 位が韓国 69 万トン。輸入国での新型コロナウイルス感染症に対するロックダ
ウンや巣ごもりなどの規制の緩和等により輸出は前年に比べ好調である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7 %から
12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧漁業大臣が 2021/22 年度のとうもろこしと小麦の
輸出に関し、輸出上限数量を設定することを表明。同省プレスによれば、とうもろこしの輸
出上限数量は 4,160 万トンとしている。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	52.0	53.0	55.0 (63.7)	—	3.8	
消 費 量	13.5	13.7	14.0 (25.0)	—	2.2	
うち飼料用	9.5	9.8	10.0 (20.0)	—	2.0	
輸 出 量	40.9	39.0	41.0 (41.0)	—	5.1	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	—	—	
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (1.8)	—	—	
期末在庫率	2.2%	2.8%	2.7% (2.7%)	—	▲ 0.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.55	7.00	7.00 (8.40)	—	—	
単収(t/ha)	7.94	7.57	7.86 (7.58)	—	3.8	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022)

写真：北部サンタフェ州の遅植えとうもろこしの生育風景 (5月2日撮影)

前年 12 月下旬に作付けされ、成熟期を迎えている。
収穫作業は 6 月を予定。



< 中国 > 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、政府補助金による大豆奨励策により作付けが大豆にシフトし、収穫面積が減少することから、前年度より0.6%減の271.0百万トンの見込み。

中国中央气象台週報（2022.5.9）によれば、5月8日時点で春とうもろこしの全国の播種率は7割を超えている。なお、南部の四川省、貴州省等では、三葉期から節間伸長期にある。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、旺盛な飼料用消費から前年度より1.4%増の295.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、主要な輸入先であるウクライナの輸出減少に伴い、前年度より21.7%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～3月の輸入量は7.1百万トンで、前年同期比で5.5%増。内訳は、ウクライナ産4.0百万トン（56%）、米国産3.0百万トン（42%）。ウクライナ産については、2月下旬のロシア侵攻前に黒海から出荷されたとうもろこしとみられている。

5月23日には、中国政府は、ブラジル産とうもろこしについても検疫問題をクリアし輸入の合意に至ったと公表した。ウクライナ産とうもろこしの調達が難しくなったことが背景にあるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年3月号」によると、3月の国内流通価格は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、東北・華北のとうもろこし産地の通常の売買が制限され、とうもろこしの物流にも支障が発生し、2,880元/トンと前月（2,820元/トン）からやや上昇した。また、3月の外国産価格は、ロシアのウクライナ侵攻が続いており、ウクライナのとうもろこし作付面積は減少すると予想されることから、3,060元/トンと前月（2,640元/トン）から大幅に上昇し、国内価格を上回った。他の穀物の代替輸入等も含め、今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

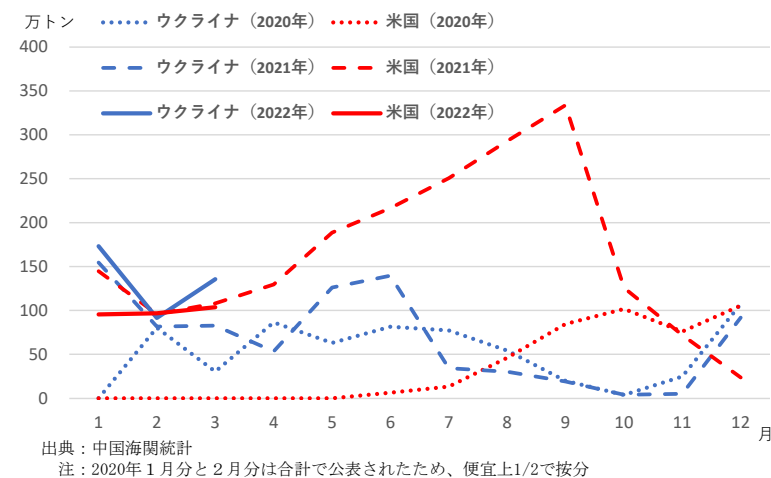
とうもろこしー中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	260.7	272.6	271.0 (273.0)	—	▲ 0.6	
消 費 量	285.0	291.0	295.0 (305.2)	—	1.4	
うち飼料用	203.0	209.0	214.0 (203.0)	—	2.4	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	—	—	
輸 入 量	29.5	23.0	18.0 (24.0)	—	▲ 21.7	
期末在庫量	205.7	210.2	204.2 (180.0)	—	▲ 2.9	
期末在庫率	72.2%	72.2%	69.2% (59.0%)	—	▲ 3.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.00 (42.50)	—	▲ 0.7	
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.30 (6.42)	—	0.2	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

図：中国におけるウクライナ・米国産とうもろこしの輸入状況



< ウクライナ > ロシアの侵攻の影響等で生産量・輸出量が大幅に減少見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実生産量は、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で、史上最高の生産量となった前年度より 53.7%減の 19.5 百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、5月12日時点の2022/23年度の播種済面積は3.2百万ヘクタールで前年同期（5.5百万ヘクタール）より減少している。

なお、USDA「Feed Outlook」（2022.5.16）によれば、アゾフ海を含むウクライナの海岸沿いをロシアに押さえられ、ロシアに占領されていないニコラエフ港やオデッサ港からの輸出も封鎖されている。このため、穀物を鉄道でポーランドやルーマニア経由で少量を輸出するしかないため、穀物の輸出が制限されてしまう。この結果、在庫水準がまれにみる高水準となり、備蓄能力を圧迫させてしまう。在庫過多によるウクライナ国内の穀物価格低下と輸出能力の不確かさで農家の作付け意欲は低下する。さらに、種子、肥料、燃料、貸付の不足やインフラの被害から穀物生産の単収と面積の両方が減少してしまう。また、とうもろこしはウクライナでは国内需要が少なく、輸出中心の換金作物で、投入コストに影響を受けやすい作物である。窒素肥料の不足により、ウクライナの実産者はとうもろこしから、油糧種子や他の作物（そば、ミレット、ジャガイモなど）に作付けを転換するとみられる。この結果、収穫面積は前年度に比べ、36.2%減と小麦や大麦など他の穀物より面積の減少率が多い。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、生産量の大幅な減少に伴い、前年度より30.3%減の9.2百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、ロシアの侵攻以降黒海の港が閉鎖された影響等から、前年度より60.9%減の9.0百万トンの見込み。この輸出量は、紛争以前の潜在的な輸出可能量の三分の一以下となっている。

ウクライナ農業政策食料省によれば、3月1日～5月9日の輸出実績は1.0百万トン。3月は18万トン（96%が鉄道利用）、4月は60万トン（72%が鉄道利用）となっている。

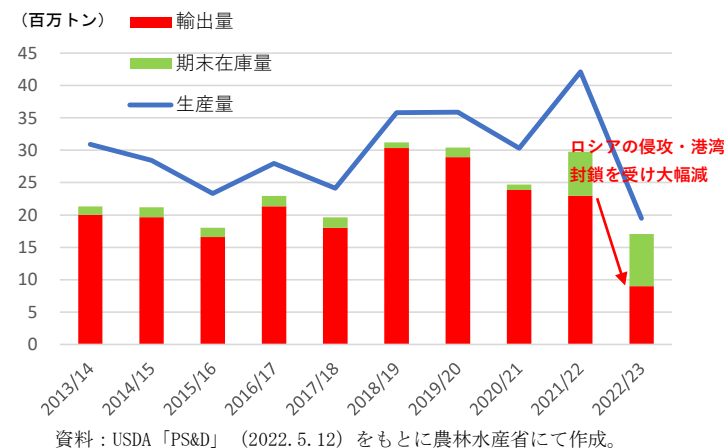
とうもろこしーウクライナ

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	30.3	42.1	19.5 (18.6)	—	▲ 53.7	
消 費 量	7.1	13.2	9.2 (8.8)	—	▲ 30.3	
うち飼料用	5.9	12.0	8.0 (5.5)	—	▲ 33.3	
輸 出 量	23.9	23.0	9.0 (16.6)	—	▲ 60.9	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	—	▲ 100.0	
期末在庫量	0.8	6.8	8.1 (4.8)	—	19.2	
期末在庫率	2.7%	18.7%	44.3% (18.9%)	—	25.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	3.50 (3.30)	—	▲ 36.2	
単収(t/ha)	5.62	7.68	5.57 (5.64)	—	▲ 27.5	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 —

- ・中国、インド、バングラデシュで増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

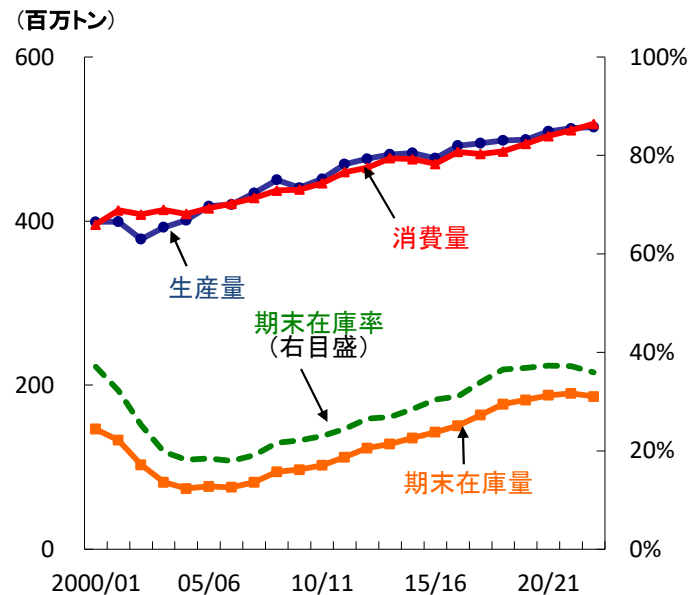
消費量 前年度比 ↑ 前月比 —

- ・インド、中国等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 —

- ・インド、タイ等主要アジア諸国で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 —



資料：USDA「PS&D」（2022. 5. 12）をもとに農林水産省にて作成

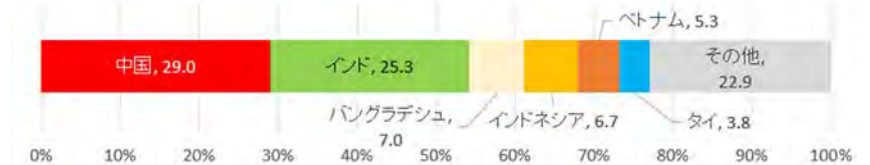
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	512.9	514.6	—	0.3
消 費 量	503.6	510.6	518.4	—	1.5
輸 出 量	50.9	52.6	54.2	—	3.0
輸 入 量	46.5	52.0	52.7	—	1.4
期末在庫量	187.8	190.1	186.3	—	▲ 2.0
期末在庫率	37.3%	37.2%	35.9%	—	▲ 1.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 May 2022）

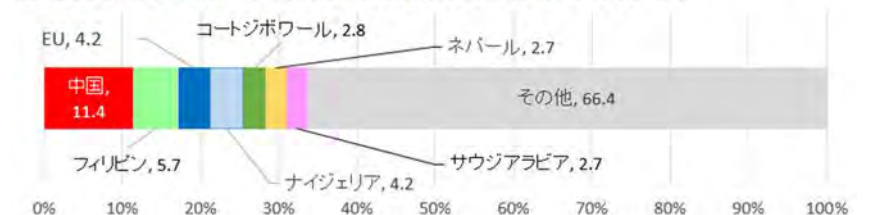
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(514.6百万トン)(単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(54.2百万トン)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(52.7百万トン)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 2年連続生産量・輸出量ともに減少

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、収穫面積の減少（対前年度比4.0%）や単収の低下（対前年度比1.4%）から、対前年度比4.8%減の5.8百万トンの見込み。このうち中・短粒種の生産量は、全体の約23%を占めるものの、11%以上減少して、1988/89年度以来の最低水準となる見込み。

同「Crop Progress」（2022.5.16）によれば、主要生産6州の作付け進捗率は80%で、過去5年平均（79%）より1ポイント進展しているものの、発芽進捗率は同平均（60%）より7ポイント低い53%となっている。これはアーカンソー州とミズーリ州で、度重なる降雨により作付けが遅れたため、発芽も遅れているもの。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、供給量の減少により、対前年度比3.0%減の4.5百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、輸出余力の減少と輸出価格の上昇が予想されることから、対前年度比3.7%減の2.6百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、タイ産ジャスミン米やインド産バスマティ米の輸入が引き続き増加すること、中国からプエルトリコ（米国領土）向け中・短粒種米の輸入が増加することにより、中・短粒種米の輸入が史上最高になると見込まれることから、対前年度比10.0%増の1.2百万トンと、史上最高となる見込み。

同「Rice Outlook」（2022.5.16）によれば、5月10日時点の地中海向けカリフォルニア米（1等、砕米4%混入）の価格は、前月から145ドル上昇して、1,365ドル／トンと過去最高。5月10日までの週のイラク向け長粒種（2等、砕米4%混入）は、前月から10ドル上昇し、675ドル／トン（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

（単位：百万精米トン）

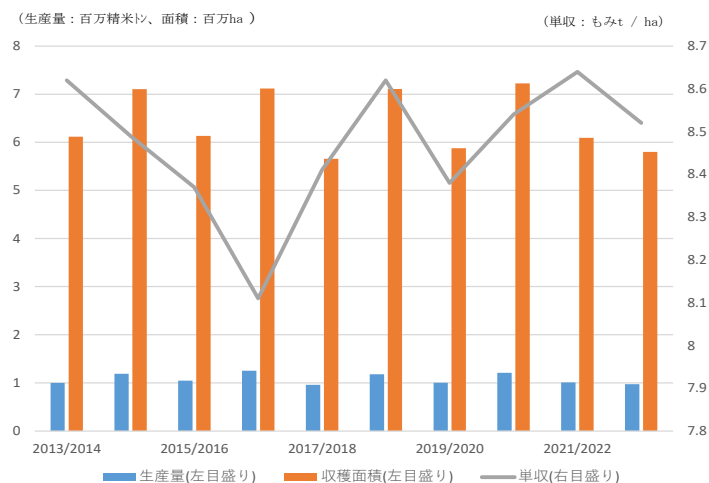
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.2	6.1	5.8	—	▲ 4.8
消費量	4.9	4.7	4.5	—	▲ 3.0
輸出量	3.0	2.7	2.6	—	▲ 3.7
輸入量	1.1	1.1	1.2	—	10.0
期末在庫量	1.4	1.2	1.1	—	▲ 11.8
期末在庫率	17.8%	16.1%	14.7%	—	▲ 1.4

（参考）

収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.97	—	▲ 4.0
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.52	—	▲ 1.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 May 2022）

図：米国の生産量・面積・単収の推移(過去10年間)



資料：USDA「PS&D」（2022.5）をもとに農林水産省にて作成

< インド > 輸出量は世界全体の約 41%

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、史上最高の単収により、2021/22年度から1.0百万トン増加して、対前年度比0.8%増の130.0百万トンと、7年連続で史上最高を更新する見込み。「Grain: World Markets and Trade」(2022.5.12)によると、農業投入財への投資の促進により単収が一層向上した。

6月のモンスーンの到来を待って、カリフ米の作付けが開始される。

なお、インド農業・農民福祉省の2021/22年度第3回食料穀物生産事前推計(2022.5.19)によると、生産量の合計は129.0百トンで、目標値の121.1百トンを上回る見通し。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、対前年度比3.4%増の107.0百万トンで、史上最高の見込み。インド政府の低所得世帯向け食料配給プログラム等で、生産が減少する小麦からコメへの配給比率引上げが予想されていることが主な要因。インドは中国とともにコメの二大消費大国。

USDA「Rice Outlook」(2022.5.16)によれば、2022/23年度の輸出量は、史上最高の生産量や価格競争力から、22.0百万トンと、前年度を4.8%上回り、史上最高となる見込み。輸出シェアは世界全体の約41%を占め、2位以下の輸出国(タイ、ベトナム、パキスタン)の合計量を上回り、世界最大のコメ輸出国となる見通し。

なお、インド商務省によると、2021年4月～2022年2月の輸出量の合計は19.1百万トン、主要輸出先はバングラデシュ(1.6百万トン)、中国(1.4百万トン)、ベナン(1.3百万トン)、ネパール(1.3百万トン)である。

USDAによると、2022/23年度の期末在庫量も、引き続き記録的な生産量が見込まれることから、1.0百万トン増加し、史上最高の42.5百万トンの見込み。期末在庫量のシェアは、世界全体の2割強を占める見通し。

インド産米(碎米5%混入)の5月10日までの週の価格は、前月から1トン当たり10ドル下落して350ドル/トンと、アジアの主要輸出国の中で最も低い価格となっている。(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)

コメーインド

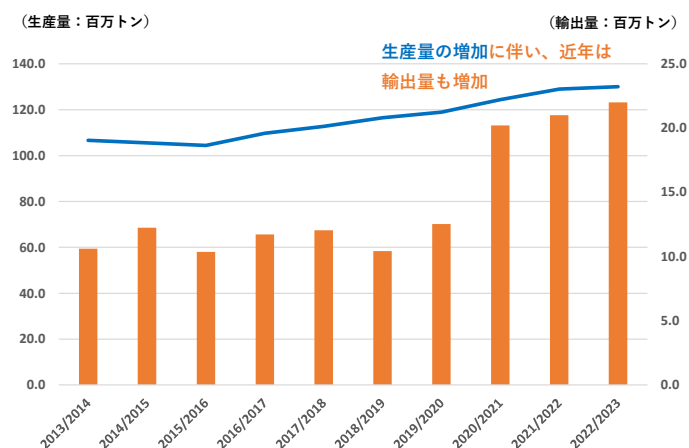
雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位: 百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	124.4	129.0	130.0	(129.5)	—	0.8
消 費 量	101.1	103.5	107.0	(108.0)	—	3.4
輸 出 量	20.2	21.0	22.0	(19.3)	—	4.8
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	—	—
期末在庫量	37.0	41.5	42.5	(39.9)	—	2.4
期末在庫率	30.5%	33.3%	32.9%	(31.3%)	—	▲ 0.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	45.77	47.00	47.00	(46.00)	—	—
単収(もみt/ha)	4.08	4.12	4.15	(2.82)	—	0.7

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)(単収は精米t/ha)

図: インドの生産量・輸出量の推移(過去10年間)



資料: USDA「PS&D」(2022.5)をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 生産量・消費量・輸入量がともに史上最高

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前年度をわずかに上回って149.0百万トンとなり、史上最高の見込み。

中国中央气象台（2022.5.10）によれば、2022/23年度について、全国早稲の移植は既に終了し、一期作米の移植は1割を超えている。二期作早期米は、福建地区は移植から分けつ期、広東、広西地区は分けつから節間伸長期、その他の地域も概ね分けつ期を迎えている。また、一期作米は、黒竜江地区は三葉期、吉林地区は播種から出苗期、遼寧地区は三葉から活着期、安徽、四川、雲南、貴州地区では概ね三葉期に入っている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、対前年度比0.7%増の156.6百万トンと、史上最高の見込み。とうもろこしなど飼料用穀物の価格高騰を背景に、低価格の砕米を飼料用として輸入・消費している。

2022/23年度の輸入量は、こうした飼料用低価格砕米の輸入増加により、前年度から0.8百万トン増加して、6.0百万トンと、史上最高となる見込み。

なお、中国海関統計によれば、2022年1～3月の輸入量は、対前年同期の1.4百万トンから約17%増の1.7百万トン。輸入先はパキスタンが0.5百万トン、インドが0.5百万トン。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、史上最高の生産量と輸入を上回る、消費の増加により、前年度末から4.0百万トン減少して、109.0百万トンの見込み。なお、世界の期末在庫量シェアのうち、中国が6割弱を占める見通し。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	148.3	149.0	149.0 (149.8)	—	0.0
消 費 量	150.3	155.4	156.6 (151.8)	—	0.7
輸 出 量	2.2	2.3	2.4 (2.5)	—	6.7
輸 入 量	4.2	5.2	6.0 (4.0)	—	15.4
期末在庫量	116.5	113.0	109.0 (107.0)	—	▲ 3.5
期末在庫率	76.4%	71.7%	68.6% (69.3%)	—	▲ 3.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	30.00 (30.03)	—	0.3
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.10 (4.99)	—	▲ 0.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」 (12 May 2022)

IGC 「Grain Market Report」 (21 April 2022) (単収は精米t/ha)

写真：黒竜江省の水稲育苗風景

(5月2日撮影。5月中旬以降移植予定)



< タイ > インドに次ぐ世界第2位のコメ輸出国に

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度（2023年1月～同年12月）の生産量は、収穫面積の拡大に伴い、対前年度比0.8%増の19.8百万トンの見込み。

2021/22年度（2022年1月～同年12月）の生産量は、前年度に比べて収穫面積と単収の増加により、対前年度比4.2%増の19.7百万トンの見込み。季節外れの降雨により、40℃近い気温による暑さが緩和された。乾季作の収穫が続いており、5月中旬時点で、収穫面積の25～30%が残っている。

モンスーンの到来を受けて、雨季作の作付けが開始された。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の増加に伴い、対前年度比7.1%増の7.5百万トンの見込みで、インドに次ぐ世界第2位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22年度の輸出量は、イラク、アフリカ、中国、米国向けの輸出が予想よりも好調なことから、0.2百万トン上方修正され、対前年度比15.5%増の7.0百万トンとなる見込み。

タイ米輸出業協会（2022.5）によれば、2022年1～3月の輸出量は1.7百万トンで、前年同期の1.2百万トンから48.5%増加した。対前年同期比でイラクが約2000倍、米国が約1.5倍、中国が約2倍となっている。

USDA「Rice Outlook」（2022.5.16）によれば、5月10日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、4月5日までの週の価格から34ドル上昇し、2021年6月中旬以来の高値である458ドル/トンとなっている（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。サブサハラアフリカ、中国、イラクから予想を上回る需要があるため、ここ1か月でタイのコメ輸出価格は、ほとんどの精米のグレードで8%ほど上昇。

コメ・タイ

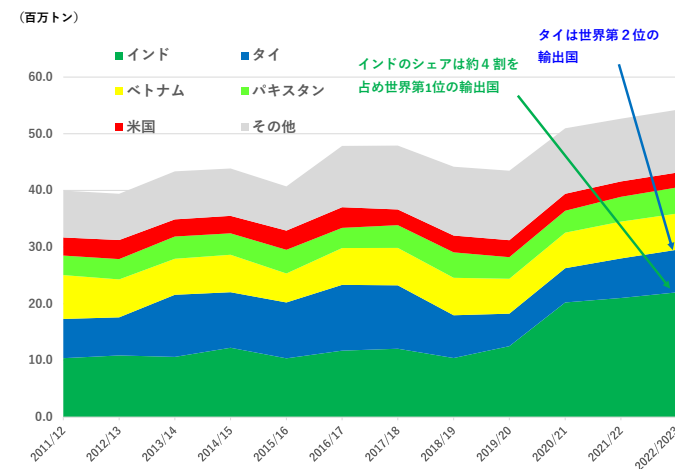
夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	18.9	19.7	19.8 (20.0)	—	0.8	
消 費 量	12.7	13.0	13.1 (12.1)	—	0.8	
輸 出 量	6.1	7.0	7.5 (7.9)	—	7.1	
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	—	—	
期末在庫量	4.3	4.1	3.5 (6.9)	—	▲ 14.5	
期末在庫率	22.8%	20.7%	17.1% (34.7%)	—	▲ 3.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.51	10.59	10.70 (10.50)	—	1.0	
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.80 (1.90)	—	▲ 0.4	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)（単収は精米t/ha）

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2022.5）をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > 2021/22 年度の冬春作の収穫が終了し、夏秋作の作付け開始

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度（2023 年 1 月～同年 12 月）の生産量は、単収が 6.01 トン/ヘクタールと過去最高になることから、対前年度比 0.3%増の 27.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度（2022 年 1 月～同年 12 月）の生産量は、単収はわずかに増加しているものの、収穫面積が引き続き漸減していることから、対前年度比 0.2%減の 27.3 百万トンの見込み。

最も生産量の多い冬春作の収穫が終了し、夏秋作の作付けが開始されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、タイおよびインドとの競争激化により、対前年度比 1.5%減の 6.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度の輸出量は、対前年度比 3.2%増の 6.5 百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022 年 1～3 月の輸出量は 1.5 百万トンであり、上位からフィリピン（0.7 百万トン）、コートジボワール（0.2 百万トン）、中国（0.2 百万トン）となっている。うちジャポニカ米は 4.3 万トン。

USDA 「Rice outlook」（2022.5.16）によれば、最近収穫された冬春作のベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の 5 月 10 日までの週の価格は、4 月中旬に最大輸出先国であるフィリピンからの需要が減少したため下落したものの、5 月第 2 週に 420 ドル/トンと、再び 4 月初旬の水準まで戻った。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

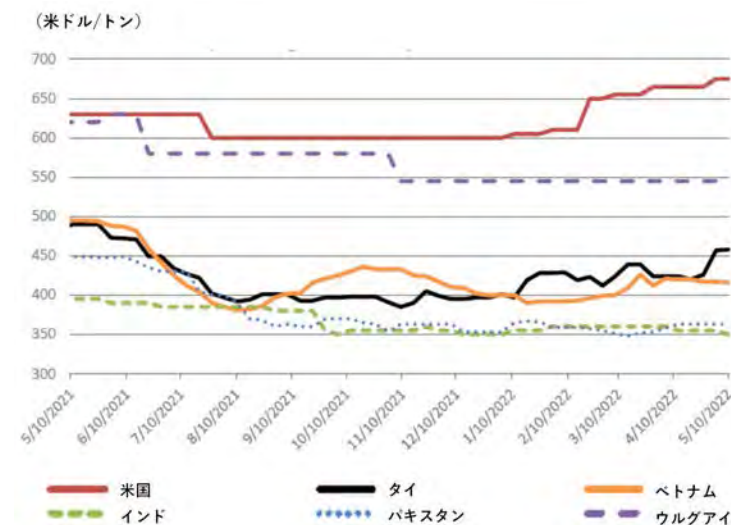
(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	27.4	27.3	27.4	(28.9)	—	0.3
消 費 量	21.5	21.5	21.6	(23.5)	—	0.2
輸 出 量	6.3	6.5	6.4	(6.5)	—	▲ 1.5
輸 入 量	1.8	0.8	0.6	(1.0)	—	▲ 25.0
期末在庫量	2.6	2.8	2.8	(3.2)	—	1.8
期末在庫率	9.5%	9.9%	10.1%	(10.5%)	—	0.2
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.31	7.30	7.29	(7.28)	—	▲ 0.1
単収(もみt/ha)	6.00	5.99	6.01	(3.98)	—	0.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)

IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain : World Markets and Trade」(2022.5.12)

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比  前月比 **—**

・ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、米国等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

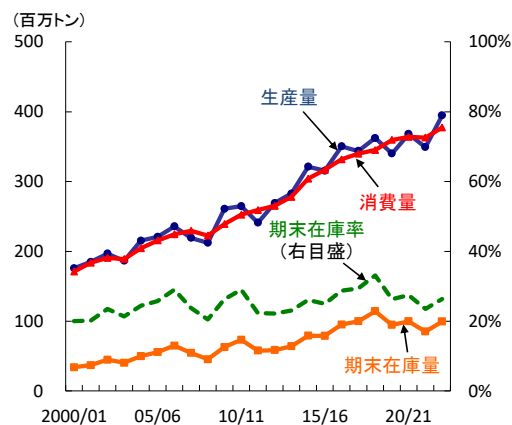
消費量 前年度比  前月比 **—**

・中国、パラグアイ、ブラジル等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 **—**

・ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 **—**



資料：USDA「PS&D」（2022. 5. 12）をもとに農林水産省で作成

◎世界の大豆需給

（単位：百万トン）

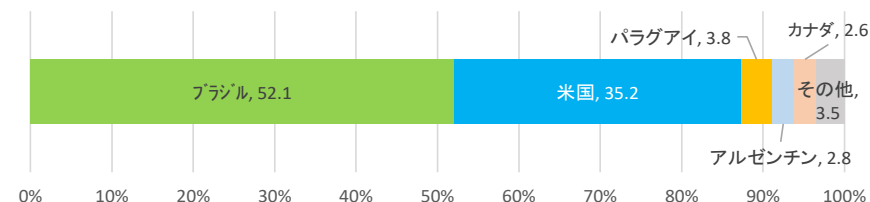
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	368.1	349.4	394.7	—	13.0
消 費 量	363.8	362.9	377.4	—	4.0
うち搾油用	315.1	313.7	326.8	—	4.2
輸 出 量	164.5	155.6	170.0	—	9.3
輸 入 量	165.5	154.5	167.1	—	8.2
期末在庫量	99.9	85.2	99.6	—	16.8
期末在庫率	27.5%	23.5%	26.4%	—	2.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 May 2022）

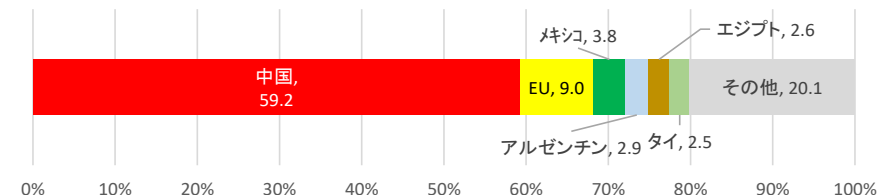
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (394.7 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量 (170.0 百万トン)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (167.1 百万トン)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 生産量は史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、肥料価格高騰を背景に、とうもろこしと比べ大豆は肥料の投入量が少ないことから収穫面積の増加により、前年度より 4.6%増の 126.3 百万トンと史上最高の見込み。

USDA「Crop Progress」(2022.5.16)によれば、5月上旬までの中西部の低温で雨がちな天候により、主要 18 州における作付け進捗率は 30%と、前年度同期 (58%) 及び過去 5 年平均 (39%) より大幅に遅れている。発芽率も 9%と、前年度同期 (19%) 及び過去 5 年平均 (12%) より遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の実消費量は、大豆粕と大豆油の需要の高まりに伴う旺盛な搾油用需要から、前年度より 2.1%増の 64.8 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、前年度より 2.8%増の 59.9 百万トンの見込み。2022/23 年度の米国の収穫が始まる 2022 年 10 月頃までは南米の大豆在庫は逼迫が予想され、輸入国は米国の輸出に大きく依存するが、南米からの新穀供給が可能となる 2023 年初頭以降は米国の大豆輸出は反動で減少するとみられる。

USDA によれば、2022 年輸出検証高 (2022 年 1 月 6 日～5 月 5 日) は、16.9 百万トンであり、内訳は中国 (8.2 百万トン)、メキシコ (1.7 百万トン)、エジプト (1.6 百万トン)、インドネシア (0.8 百万トン)、日本 (0.7 百万トン) の順。

USDA によれば、2022/23 年度の期末在庫量は、生産量の増加が消費量・輸出量の増加を上回ることから、前年度より 31.9%増の 8.4 百万トンの見込み。なお、期末在庫率は 6.8%で、前年度を上回るものの、依然として低水準の見込み。

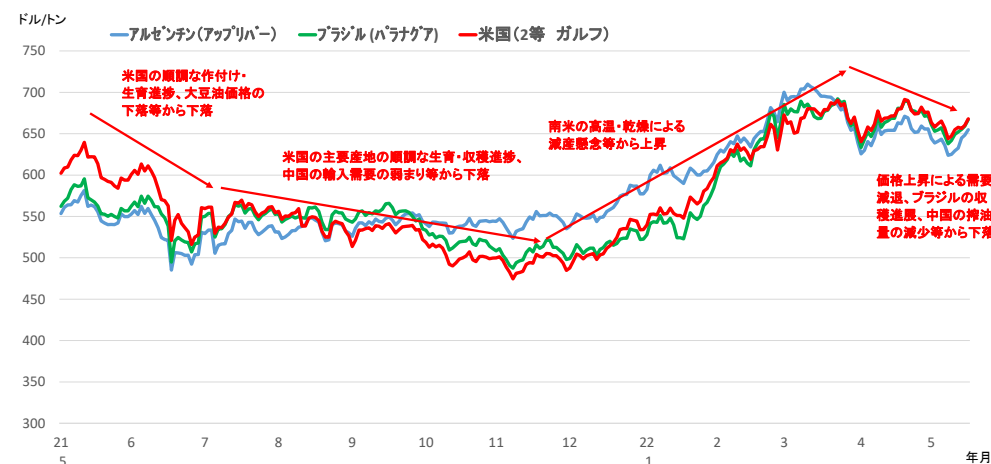
大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	114.8	120.7	126.3	—	4.6
消 費 量	61.1	63.5	64.8	—	2.1
うち搾油用	58.3	60.3	61.4	—	1.8
輸 出 量	61.5	58.2	59.9	—	2.8
輸 入 量	0.5	0.4	0.4	—	—
期末在庫量	7.0	6.4	8.4	—	31.9
期末在庫率	5.7%	5.3%	6.8%	—	1.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.43	34.94	36.46	—	4.4
単収(t/ha)	3.43	3.45	3.46	—	0.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格 (FOB) の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

< ブラジル > 2021/22 年度の収穫終盤、高温・乾燥で減産見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降に作付けが開始される 2022/23 年度の生産量は、収穫面積及び単収の増加から、前年度より 19.2%増の 149.0 百万トンと史上最高の見込み。

なお、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告(2022.5.12)によれば、2021/22 年度の実産量は、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受け、前年度より 10.4%減の 123.8 百万トンの見込み。

最大生産州である中西部マット・グロッソ州では例年より早く収穫が終了。南部のパラナ州でも 5 月 9 日現在、収穫は終了した。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、旺盛な搾油用需要から、前年度より 2.7%増の 52.1 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量の増加に伴い、前年度より 6.9%増の 88.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1～4 月の輸出量は 30.4 百万トンで、前年同期(31.5 百万トン)に比べ 3.5%減となっている。内訳は、1 位が中国 22.3 百万トン、2 位がスペイン 1.6 百万トン、3 位がタイ 0.9 百万トンとなっている。なお、4 月の輸出量は 11.5 百万トンで前年同月(16.1 百万トン)と比べ、28.8%減となっている。例年より収穫の遅れが目立った前年と異なり、本年は年初から輸出が順調であったため、4 月の輸出量は前年より低い数量となった。

大豆—ブラジル

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	139.5	125.0	149.0 (140.5)	—	19.2	
消費量	49.9	50.8	52.1 (48.8)	—	2.7	
うち搾油用	46.7	47.5	48.8 (46.0)	—	2.6	
輸出量	81.7	82.8	88.5 (88.3)	—	6.9	
輸入量	1.0	0.5	0.8 (0.2)	—	66.7	
期末在庫量	29.4	21.4	30.5 (6.5)	—	42.8	
期末在庫率	22.4%	16.0%	21.7% (4.7%)	—	5.7	

(参考)

収穫面積(百万ha)	39.20	40.80	42.00 (40.70)	—	2.9
単収(t/ha)	3.56	3.06	3.55 (3.45)	—	16.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2021/22年度	2021年												2022年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等												収穫 24.7(百万t)								
冬とうもろこし	マット・グロッソ州、パラナ州等												収穫 89.9(百万t)								
大豆	マット・グロッソ州、パラナ州等												収穫 123.8(百万t)								

資料：CONAB穀物レポート (2022. 5. 12)

< アルゼンチン > 2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDAによれば、本年11月以降作付けが開始される2022/23年度の生産量は、収穫面積及び単収の増加から、高温・乾燥の影響を受けた前年度より21.4%増の51.0百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22年度の実産量は、生育期の高温・乾燥の影響で、2020/21年度より9.1%減の42.0百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.5.19）によれば、2021/22年度の収穫進捗率は78%で、過去5年平均より7ポイント遅れている。作柄は良からやや良が66%で前週（67%）からわずかに悪化。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の増加に伴い、前年度より2.3%増の48.3百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の増加に伴い、前年度より70.9%増の4.7百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022年1～3月の輸出量は1.4万トンで、前年同期（3.8万トン）より62.1%減。内訳は、1位がチリ1.1万トンとなっている。ブラジルの収穫が遅れた前年に比べ、隣国ブラジルで収穫が予定通りに進んだために、前年に比べ輸出が減少した。

アルゼンチンは、大豆輸出量よりも、搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%に設定。さらに、2022年3月19日付けアルゼンチン農牧漁業省プレスによれば、大豆油及び大豆粕の輸出税について2022年末まで2%引き上げ、大豆と横並びの33%と変更した。

大豆ーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	46.2	42.0	51.0 (47.1)	—	21.4	
消費量	47.4	47.2	48.3 (47.3)	—	2.3	
うち搾油用	40.2	40.0	41.0 (41.3)	—	2.5	
輸 出 量	5.2	2.8	4.7 (4.1)	—	70.9	
輸 入 量	4.8	2.2	4.8 (4.6)	—	118.2	
期末在庫量	25.1	19.3	22.1 (2.6)	—	14.5	
期末在庫率	47.6%	38.6%	41.7% (5.1%)	—	3.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	16.00	17.00 (16.50)	—	6.3	
単収(t/ha)	2.81	2.63	3.00 (2.85)	—	14.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(12 May 2022)

IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

写真：北部サンタフェ州の大豆の収穫風景
（4月25日撮影）



< 中国 > 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、政府の補助金による大豆奨励策から主に収穫面積の増加により、前年度より6.7%増の17.5百万トンの見込み。

中国中央气象台週報（2022.5.9）によれば、5月8日時点で、全国の播種率は2割を超えている。なお、主産地の東北地区で播種期から出苗期にある。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、国内大豆粕需要の回復による搾油用消費量の増加から、前年度より6.3%増の115.6百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、搾油用消費量の増加に伴い、前年度より7.6%増の99.0百万トンの見込み。

なお、2021/22年度の輸入量は、中国の一人当たり消費量及び人口増加見通しの上方修正を反映し、前月予測から1.0百万トン上方修正し、92.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～3月の輸入量は20.3百万トンと、前年同期比で4.2%減。内訳は、米国産13.4百万トン（66%）、ブラジル産6.4百万トン（31%）。前年同期は米国産の輸入が9割を占めていたが、2022年はブラジル産の輸入シェアが高まっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年3月号」によると、3月は、天候が暖かくなり、各地で旬の野菜が次々と出荷され、一部の大豆製品の需要を代替したため、産地市場における大豆売買が低調であった一方で、新型コロナの状況が厳しく物流費が高騰したために消費地の売買も低調であった。このため、全体的に市場価格は平穏ではあったが、3月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,500元/トン）から横ばいの6,500元/トンで、依然として高水準で推移している。3月の外国産価格（山東省の輸入大豆価格）は、南米産大豆の減産やロシアのウクライナ侵攻の影響を受けた穀物価格等の高騰を背景に、5,320元/トンと前月（5,040元/トン）から大幅に上昇した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

大豆—中国

（単位：百万トン）

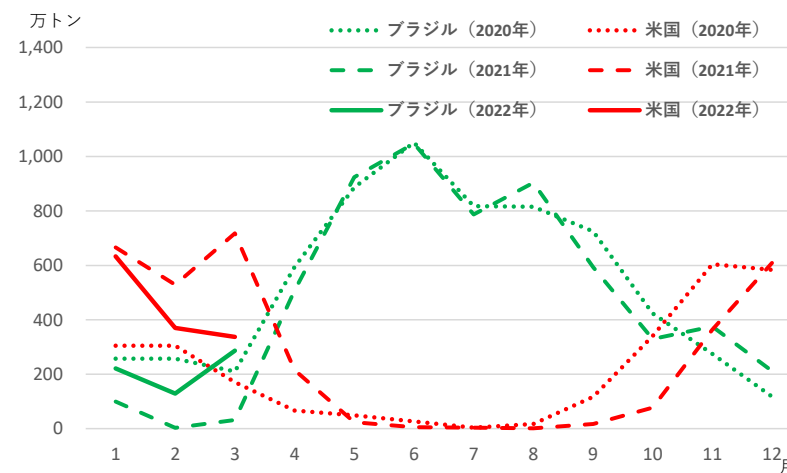
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.6	16.4	17.5 (17.5)	—	6.7
消 費 量	112.7	108.7	115.6 (115.0)	—	6.3
うち搾油用	93.0	89.0	95.0 (96.5)	—	6.7
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	—	—
輸 入 量	99.8	92.0	99.0 (98.0)	—	7.6
期末在庫量	31.2	30.8	31.6 (28.9)	—	2.6
期末在庫率	27.6%	28.3%	27.3% (25.1%)	—	▲ 1.0

(参考)

収穫面積(百万ha)	9.88	8.40	8.90 (8.90)	—	6.0
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.97 (1.97)	—	1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積の増加により増産、輸出量も増加見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、単収は減少するものの、収穫面積の増加から、前年度より0.4%増の6.3百万トンの見込み。

カナダ統計局「Principal field crop areas, March 2022」(2022.4.26)によれば、2022/23年度の作付意向面積は、前年度より0.7%増の2.2百万ヘクタールの見込み。最大の生産州であるオンタリオ州では、前年度より3.2%増の1.3百万ヘクタールの見込み。

また、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.5.20)によれば、2022/23年度の生産量は、上記の作付意向面積と過去5年平均単収を前提とすれば、前年度より2.0%増の6.4百万トンの見込み。なお、オンタリオ州では天候に恵まれ、作付けが順調に進展している。マニトバ州を含む平原南東部では洪水や水分過多により作付けが遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前年度より0.9%増の2.4百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前年度より6.0%増の4.5百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2021/22年度(2021年8月～2022年7月)のうち、2021年8月～2022年3月の輸出量は259.9万トンで、国別では、イラン(47.1万トン)、イタリア(34.6万トン)、オランダ(22.6万トン)、アルジェリア(21.9万トン)、中国(21.2万トン)の順。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			
			予測値、()はAAFC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.4	6.3	6.3	(6.4)	—	0.4
消 費 量	2.7	2.3	2.4	(2.4)	—	0.9
うち搾油用	1.6	1.8	1.8	(1.9)	—	—
輸 出 量	4.5	4.2	4.5	(4.5)	—	6.0
輸 入 量	0.5	0.5	0.5	(0.4)	—	▲ 2.0
期末在庫量	0.3	0.5	0.5	(0.4)	—	▲ 3.8
期末在庫率	4.1%	8.1%	7.4%	(5.1%)	—	▲ 0.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	2.04	2.13	2.20	(2.17)	—	3.3
単収(t/ha)	3.12	2.94	2.86	(2.96)	—	▲ 2.7

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 May 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(20 May 2022)

写真：カナダ中東部オンタリオ州の大豆の作付け風景
(5月8日撮影)



(参考)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。

例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。

なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

第11号特別分析トピック：ブラジル、豪州、カナダ、スイスの農業政策の概要

ブラジルの農業概況

- 国土面積 8 億5,158万ha（日本の約23倍）に対し、農用地は 2 億3,688万ha（日本の約54倍）で、その約 7 割に当たる 1 億7,336万haが永年採草・牧草地となっており、耕地面積は5,576万ha（日本の約14倍）。
- 国内総生産に占める農業の割合は約 4 ～ 5 %（2020年は4.4%。853億ドル）だが、総輸出額に占める農畜産物の割合は約35%となっており、農牧業は重要な産業となっている。
- 広大な国土、温暖な気候、多くの水資源を有し、世界有数の農業生産国である。
- 伝統的な農産物であるさとうきび（7.6億トン）、コーヒー（370万トン）、オレンジ（1,671万トン）の生産量は世界第 1 位であるほか、近年は畜産物や飼料作物等の生産が大きく拡大しており、大豆（1.2億トン）、牛肉（1,010万トン）、鶏肉（1,379万トン）、とうもろこし（1.04億トン）は世界第 3 位の生産量となっており、これら農畜産物の輸出も増加している。
- 地域的にみると、古くから農牧業が盛んであった南部地域及びサンパウロ州に加え、1970～80年代に我が国が協力実施したセラード開発の成果もあり、近年は中西部地域及びミナスジェライス州の生産拡大が大きい。
- しかしながら、広大な国土を有するが故に貯蔵施設や内陸生産地からの運搬・積出のための輸送（道路、鉄道）・港湾インフラの整備が課題となっている。

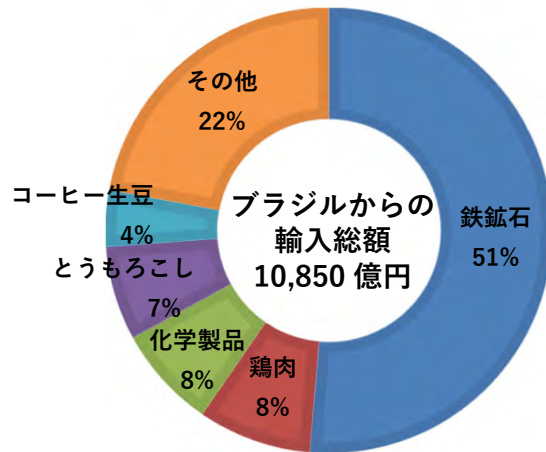


北部地域		北東部地域		南東部地域	南部地域	中西部地域
RO：ロンドニア州	PA：パラ州	PI：ピアウイー州	PE：ペルナンブコ州	MG：ミナスジェライス州	PR：パラナ州	MS：南マットグロッソ州
AC：アクレ州	AP：アマパー州	CE：セアラ州	AL：アラゴアス州	ES：エスピリトサント州	SC：サンタカタリーナ州	MT：マットグロッソ州
AM：アマゾナス州	TO：トカンチンス州	RN：北リオグラデ州	SE：セルジッペ州	RJ：リオデジャネイロ州	RS：南リオグランデ州	GO：ゴイアス州
RR：ロライマ州	MA：マラニョン州	PB：パライーバ州	BA：バイーア州	SP：サンパウロ州		DF：連邦直轄区

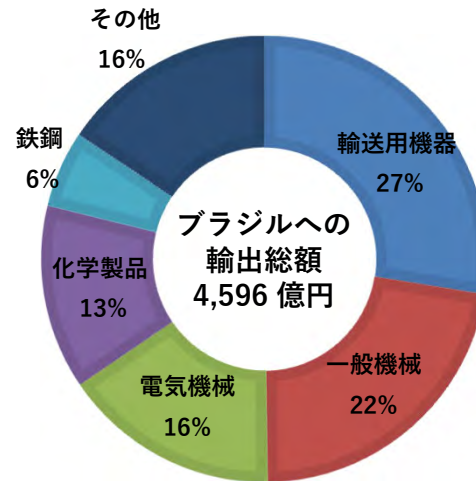
我が国とブラジルの農林水産品貿易

日・ブラジル間の貿易状況 (2021)

【ブラジル→日本】



【日本→ブラジル】



出典：財務省貿易統計

ブラジルの対世界輸出状況 (2020)

品 目	輸出額 (百万ドル)	割 合 (%)
大 豆	28,564	33.5
牛 肉	7,429	8.7
粗 糖	7,381	8.7
大豆油かす	5,909	6.9
とうもろこし	5,853	6.9
農林水産品 合計	85,150	100

ブラジルの主な農産品生産 (2020)

品 目	生産量 (万トン)	(参考) 日 本
さとうきび	75,712	117
大豆	12,180	22
とうもろこし	10,396	0.02
キャッサバ	1,821	-
オレンジ	1,671	3
鶏肉	1,379	235
コメ(粳)	1,109	971

出典：FAOSTAT

日・ブラジル間の主な農林水産品の輸出入状況 (2021)

【ブラジル → 日本 (輸入)】

	品 目	輸入額(百万円)	輸入量
1	とうもろこし	73,925	2,347 千トン
2	鶏 肉	88,948	433 千トン
3	大豆油かす	19,615	349 千トン
4	大 豆	32,022	495 千トン
5	コーヒー豆(生豆)	44,548	146 千トン
	合 計	309,900	

【日本 (輸出) → ブラジル】

	品 目	輸出額(百万円)
1	播種用の種等	321
2	ソース混合調味料	180
3	デキストリン等	106
4	アルコール飲料	165
5	菓子(米菓を除く)	119
	合 計	1,670

出典：財務省貿易統計

ブラジルの農業政策の概要

(1) 総論

- 農業政策は市場志向型であり、毎年新しい農業年度が始まる7月前に「農畜産業計画」として政府から発表される。
- 農業融資、最低価格保証制度、農業災害保険が主要な政策手段。

(2) 農業予算

- 2021年度の農業関連予算は国家予算全体の0.3%。
- 農業への補助金は少ない。

国家予算及び農林水産業関係予算

(単位：10億レアル)

	2019 年度	2020 年度	2021 年度
国家予算	3,262	3,566	4,181
農林水産業関係予算	11.90	12.13	12.76

出典：ブラジル経済省ウェブサイト

(3) 貿易政策

- ブラジルは南米南部共同市場（メルコスール）の加盟国。
メルコスール理事会決議により、2001年6月以降、第三国又は域外ブロックとの通商協定交渉は、加盟国単独ではなく、メルコスールとして共同で行うこととされている。

- カナダ、韓国、シンガポール、EFTA、パレスチナ、レバノンとF T A交渉中。

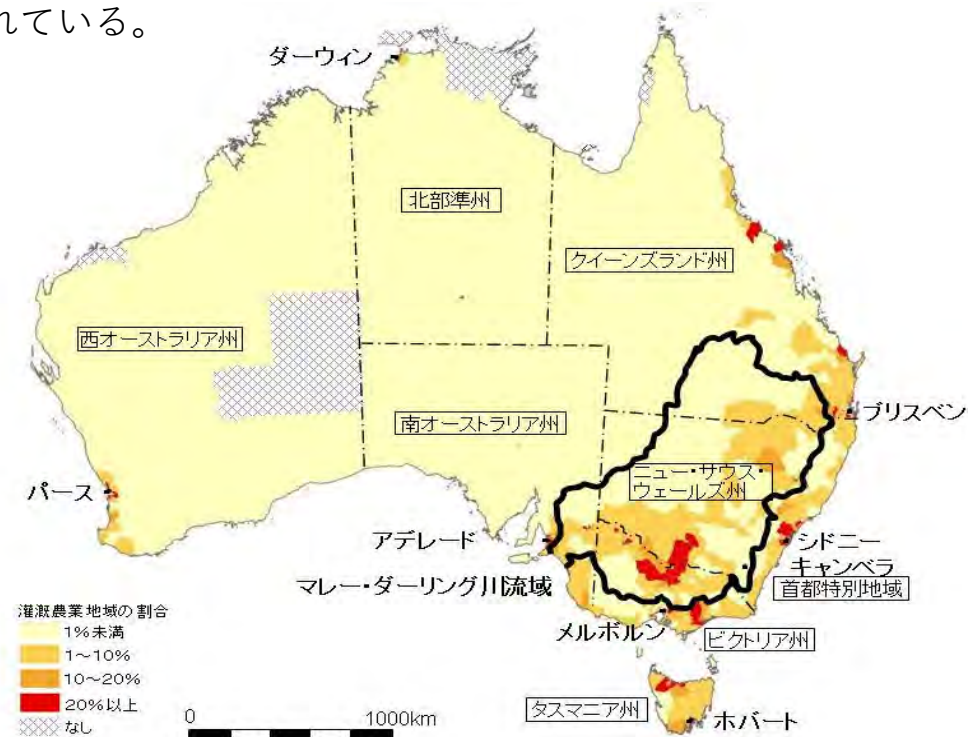
※注：メルコスールとは1995年に設立された関税同盟。

現在活動中の加盟国は、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイ。

豪州の農業概況

- 国土面積 7 億7,412万ha（日本の約20倍）に対し、農用地は3億6,248万ha（日本の約82倍）。
ただし、降雨量が少ないため農用地の約 9 割が放牧地であり、耕地面積は4,696万ha（日本の約11倍）。
- 農業経営体数は約 8 万 8 千戸。1 経営体当たりの平均経営面積は約4,119ha（放牧地も含む）で、日本（3.2ha）の約 1,278倍。ただし、耕地面積に限ると 1 経営体当たりの平均経営面積は約412haで日本の約129倍。
- 各地域の気候や灌漑用水へのアクセス等に応じた農業が営まれている。

①内陸の乾燥、半乾燥地域	:	肉牛や羊の放牧
②乾燥・半乾燥地域の外側の年間降水量500ミリ前後の地域	:	小麦等穀物、穀物と肉牛・羊放牧との組み合わせ
③比較的降水量の多いビクトリア州等の沿岸地域	:	酪農
④マレー川及びダーリング川流域の灌漑地域	:	果樹、野菜、コメ、綿花
⑤クイーンズランド州東部沿岸地域	:	さとうきび

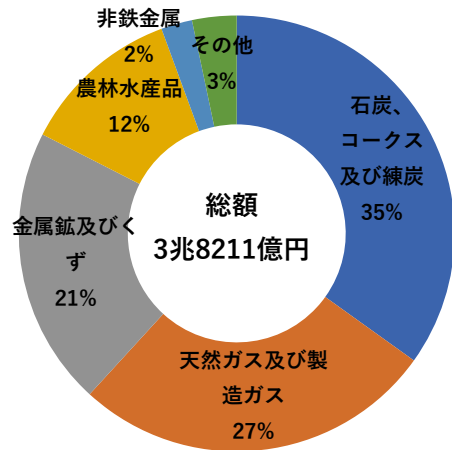


- 農業生産額（2019年度）は671.2億豪ドルであり、品目別では食肉（約219億豪ドル）、小麦（約49億豪ドル）、生乳（約48億豪ドル）が上位を占めている。
- 農業生産能力に比して国内市場が小さい（人口約2,569万人）ことから、豪州農業は輸出依存度が極めて高く、農産物の総生産の約3分の2は輸出に向けられる。このため、国内総生産に占める農業GDPの割合は約1.9%であるのに対して、総輸出額に占める農産物輸出額の割合は約11%と高く、このことが豪州経済において農業が重要産業に位置づけられる大きな要因の一つとなっている。

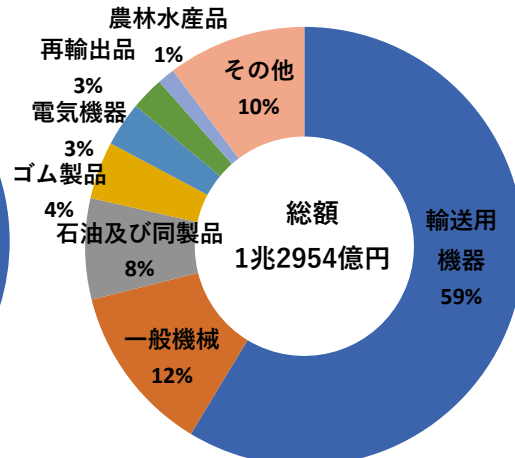
我が国と豪州の農林水産貿易

日豪間の貿易状況(2020)

【豪州→日本】



【日本→豪州】



出典：財務省貿易統計

豪州の対世界輸出状況 (2020)

品目	輸出額 (百万ドル)	シェア (%)
牛肉	6,196	20.7
小麦	2,698	9.0
羊肉	2,537	8.4
ワイン	2,035	6.8
羊毛	1,444	4.8
農林水産品合計	29,884	100.0

豪州の主な農産品生産 (2020)

品目	豪州 (万トン)	(参考) 日本(万トン)
小麦	1,448	95
さとうきび	3,028	117
大麦	1,013	22
牛乳	880	744
牛肉	237	48

出典：FAOSTAT

日豪間の主な農林水産品の輸出入状況(2020)

【豪州→日本】

	品 目	輸入額(億円)	輸入量
1	牛肉	1,622	2.6万トン
2	砂糖	354	90.2万トン
3	木材チップ	331	147.6万トン
4	ナチュラルチーズ	313	7.2万トン
5	小麦	264	79.7万トン
	合計	4,543	

【日本→豪州】

	品 目	輸出額(億円)
1	清涼飲料水	40.1
2	アルコール飲料	26.1
3	ソース混合調味料	18.5
4	醤油	5.8
5	ホタテ貝	5.6
	合計	165.2

出典：財務省貿易統計

豪州の農業政策の概要

(1) 総論

- 豪州は連邦国家であり、行政面でも州権が強く、農業政策に関する連邦政府の権限は、国際貿易交渉、動植物検疫、輸出認証といった対外政策や各州横断的な政策に限定。

(2) 農業予算

- 連邦政府が予算計上する農林水産関係の施策は、①調査・研究・開発等産業別支援、②インフラ整備、干ばつ対策等産業横断的支援、③動植物検疫等行政サービスの3つに大別される。
このうち、産業別支援は法律に基づき設立された法的機関に予算を配分し、各機関が生産者からの課徴金と政府からの配分金を原資に事業を実施する形が一般的。
- 2021年度の農林水産関係予算は連邦予算全体の0.8%。
- 2021年度より、農地の生物多様性維持に貢献した生産者に対する試行的な助成制度（Carbon + Biodiversity Pilot）を新設。
- なお、豪州には連邦予算を伴うような価格・所得支持政策、生産調整・休耕制度は存在しない。

国家予算及び農業関係予算

（単位：百万豪ドル）

	2019年度	2020年度	2021年度
国家予算	500,872	670,330	589,334
農林水産業関連予算	2,871	3,913	4,483

出典：豪政府の予算サイト (www.budget.gov.au)

※為替レート：1豪ドル＝約86円（R4.3.14現在）

(3) 貿易政策

- 2013年9月に成立した保守連合政権は、WTO交渉の停滞等の現状を踏まえ、二国間FTA交渉を重視。
特に、日・中・韓とのFTA/EPA早期締結を目標に掲げ、豪韓FTAは2014年12月、日豪EPAは2015年1月、豪中FTAは2015年12月にそれぞれ発効。現在、4つのFTA（GCC、インド、EU、英国）を交渉中。

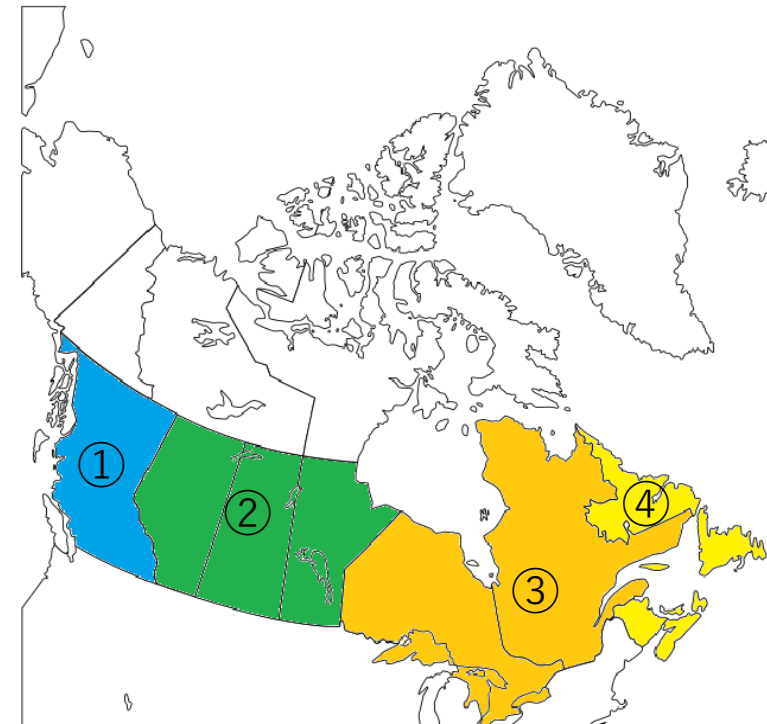
(4) 農業競争力白書

- 2013年9月の連邦選挙時における選挙公約であった。
農業競争力白書（我が国でいう「基本計画」に該当）は2015年7月に公表。その柱は①競争政策・規制・税制の見直し、②インフラへの投資、③干ばつ対策、④研究開発・労働力確保、⑤輸出市場へのアクセスとなっている。

カナダの農業概況

- 10州の国土面積 9 億9,847万ha（日本の約26倍）に対し、農用地は6,526万ha（日本の約14倍）で、耕地面積は 4,602万ha（日本の約11倍）。広大な国土を有するものの、そのほとんどが森林、湖沼、山岳等であり、国土に占める農用地面積の割合はわずか 6 %である。また、北部は寒冷な気候で農業生産に不適。
- 農業経営体数は約19万戸。1 経営体当たりの平均経営面積は約332haで、日本（2.7ha）の約123倍。
- 農業生産額（2015年）は681億ドル。

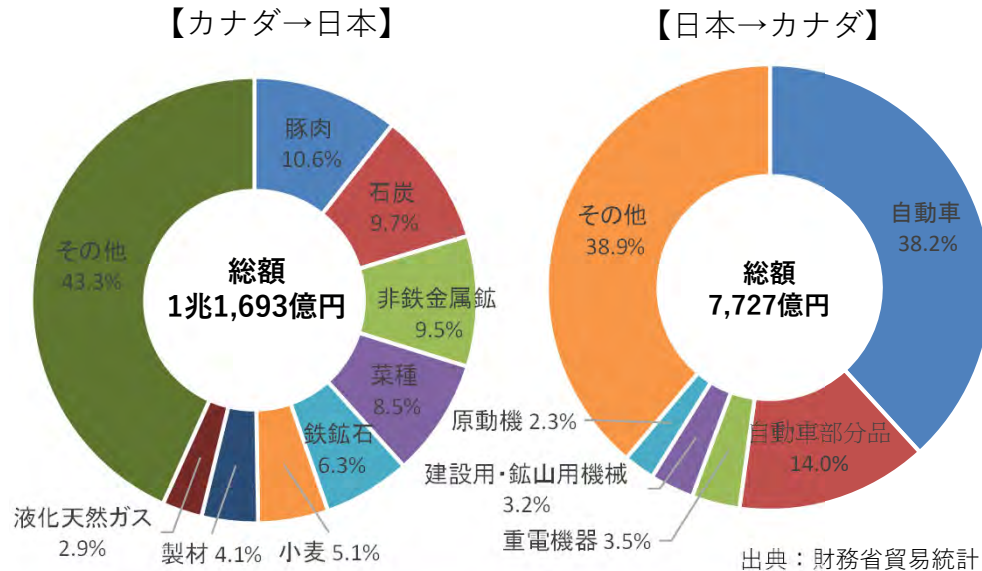
地域		主要な農作物
①太平洋岸 (ブリティッシュ・コロンビア州)	:	園芸・酪農 (都市近郊農業)
②平原州(プレーリー) (アルバータ州、サスカチュワン州、マニトバ州)	:	小麦・大麦・カノーラ(菜種) 牛肉・豚肉
③中央カナダ (オンタリオ州、ケベック州)	:	酪農・園芸(都市近郊農業) とうもろこし・大豆
④大西洋岸 (ニュー・ブランズウィック州、ノヴァ・スコシア州、プリンス・エドワード・アイランド州、ニューファンドランド・ラブラドル州)	:	小規模農場



- 世界有数の農業大国で、小麦（2,928万トン）、菜種（1,556万トン）、とうもろこし（1,149万トン）のほか、畜産物の生産が盛ん。菜種とレンズ豆は世界第1位、製材が世界第3位の生産量である。
- 農用地の約 8 割を平原州（アルバータ州、サスカチュワン州、マニトバ州）が占めており、これらの州で小麦、大麦、菜種の大部分が生産されている。
- 日本が輸入する菜種の95%はカナダ産。

我が国とカナダの農林水産貿易

日・加間の貿易状況(2020)



カナダの対世界輸出状況(2020)

品目	輸出額 (百万米ドル)	シェア (%)
小麦	6,318	12.4
菜種	4,698	9.2
菜種油	2,818	5.5
ペストリー	2,676	5.3
豚肉	2,620	5.2
農林水産品合計 (アルコール、蒸留酒、 タバコを含む。)	50,795	100.0

カナダの主な農産品生産(2020)

品目	カナダ (万トン)	(参考) 日本(万トン)
小麦	3,518	95
菜種	1,948	0.4
とうもろこし	1,356	0.02
大麦	1,074	22
牛乳	933	744
大豆	636	22
豚肉	230	131

出典：FAOSTAT

日・加間の主な農林水産品の輸出入状況(2020)

【カナダ→日本】

	品 目	輸入額(億円)	輸入量
1	豚肉	1,240	23.3万トン
2	菜種	998	219.4万トン
3	小麦	595	193.8万トン
4	製材	463	118.0万m ²
5	大豆	221	31.3万トン
	合計	5,195	

【日本→カナダ】

	品 目	輸出額(億円)
1	アルコール飲料	9.9
2	ソース混合調味料	7.8
3	植物性油脂	6.6
4	ごま油	6.6
5	緑茶	6.6
	合計	109.1

出典：財務省貿易統計

カナダの農業政策の概要①

(1) 総論

- カナダは供給管理制度（①生産割当、②生産者価格設定、③輸入に対する関税割当の3本柱）によって乳製品、鶏肉、鶏卵、七面鳥肉を生産する国内の畜産農家を保護している。
- 連邦と州・準州との農業政策の枠組み協定として「カナダ農業パートナーシップ（Canadian Agricultural Partnership）」（2018年度から2022年度までの5か年協定）がある。3つの重点分野（①貿易及び市場の拡大、②革新的で持続可能な成長、③多様性とダイナミックな進化の支援）と経営安定対策を重点事項としている。

(2) 農業予算

- 2021年度の農業関係予算は国家予算全体の約0.9%。

国家予算及び農業関係予算

（単位：百万加ドル）

	2019年	2020年	2021年
国家予算	303,560	478,690	342,190
農業関係予算	2,567	3,449	3,022

(3) 貿易政策

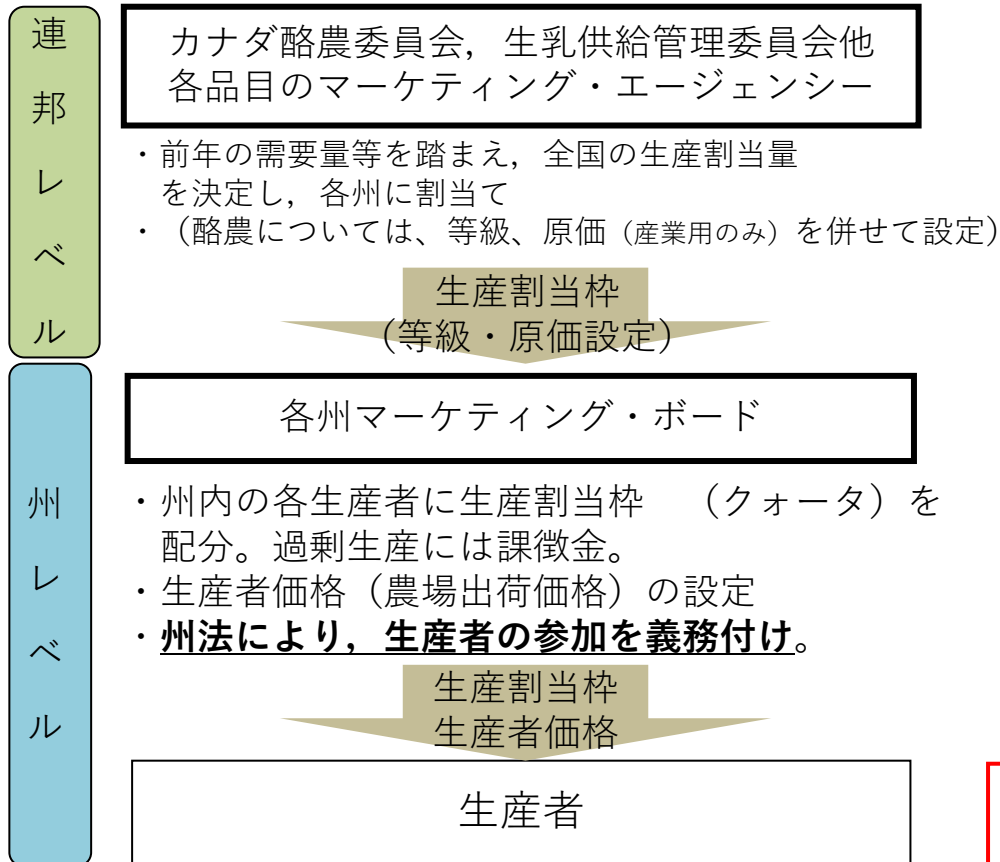
- CPTPPは2018年12月発効。米国・メキシコとのUSMCAは2020年7月発効。
- EU、EFTA（欧州自由貿易連合；スイス、ノルウェー、アイスランド、リヒテンシュタイン）、チリ、ペルー、コロンビア、韓国等16の経済連携協定を発効。なお、EUとのCETAは2017年9月より暫定的に発効。
- 現在、中米3か国、インド、モロッコ、インドネシア、日本等10か国・地域とのFTAを交渉中（注：日本との交渉は2014年11月以降停止中）。

カナダの農業政策の概要②

- カナダは供給管理制度（国内での①生産割当、②生産者価格設定と③輸入に対する関税割当の3本の柱）によって乳製品、鶏肉、鶏卵、七面鳥肉を生産する国内の畜産農家を保護。
- CPTPPでは無関税割当枠（乳製品：国内生産量の3.25%、鶏卵：同2.3%、鶏肉：同2.1%等）を設定。
- USMCAでは米国からの輸入に対して無関税割当枠（乳製品：国内生産量の3.6%等）を設定。

◇国内での生産割当、生産者価格設定の仕組み

◇供給管理品目に対する枠外税率



品目	割当枠外の税率 (下記の高い方)
鶏肉	238%又は 167セント/kg
鶏卵	163.5%又は 79.9セント/ダース
七面鳥肉	154.5%又は 211セント/kg
ヨーグルト	237.5%又は 46.6セント/kg
バター	298.5%又は 400セント/kg
チーズ	245.5%又は 452セント/kg

【関税割当】

一定の輸入数量の枠内に限り、無税又は低税率を適用する仕組みであり、特に、乳製品については、WTO枠に加えて、CPTPP、USMCA等により、国内生乳生産量の約10%分に相当する関税割当枠を設定。

※制度への参加は法的な義務。補助金等のインセンティブによる参加奨励ではない。

カナダの農業政策の概要③

- カナダ農業パートナーシップ（CAP）は連邦・州・準州政府が合意した5年間のカナダ農業基本政策枠組み（期間は2018年度～2023年度）※カナダ憲法上、農業政策は連邦と州・準州の共管
- 予算総額は30億加ドル（2018年度からの5年間。連邦、州、準州の合計）

◇ カナダ農業パートナーシップの重点項目

- ①貿易及び市場の拡大、②革新的で持続可能な成長、③多様性とダイナミックな進化の支援
- 農業経営安定対策（Business Risk Management(BRM)）

◇連邦政府プログラム【予算額:約10億加ドル】

- (1) 重点分野1：貿易及び市場の拡大 【297百万加ドル】
 - ① AgriMarketingプログラム 【121百万加ドル】
 - ② AgriCompetitivenessプログラム 【20.5百万加ドル】
- (2) 重点分野2：革新的で持続可能な成長 【690百万加ドル】
 - ③ AgriScienceプログラム 【338百万加ドル】
 - ④ AgriInnovateプログラム 【128百万加ドル】
- (3) 重点分野3：多様性とダイナミックな進化の支援 【166.5百万加ドル】
 - ⑤ AgriDiversityプログラム 【5百万加ドル】
 - ⑥ AgriAssuranceプログラム 【74百万加ドル】

◇費用分担プログラム【予算額:約20億加ドル】

各州及び準州において、各地域の実情に合わせて追加的なプログラムの設計及び実施が可能となっている。（連邦と州（準州）の負担割合は6：4）

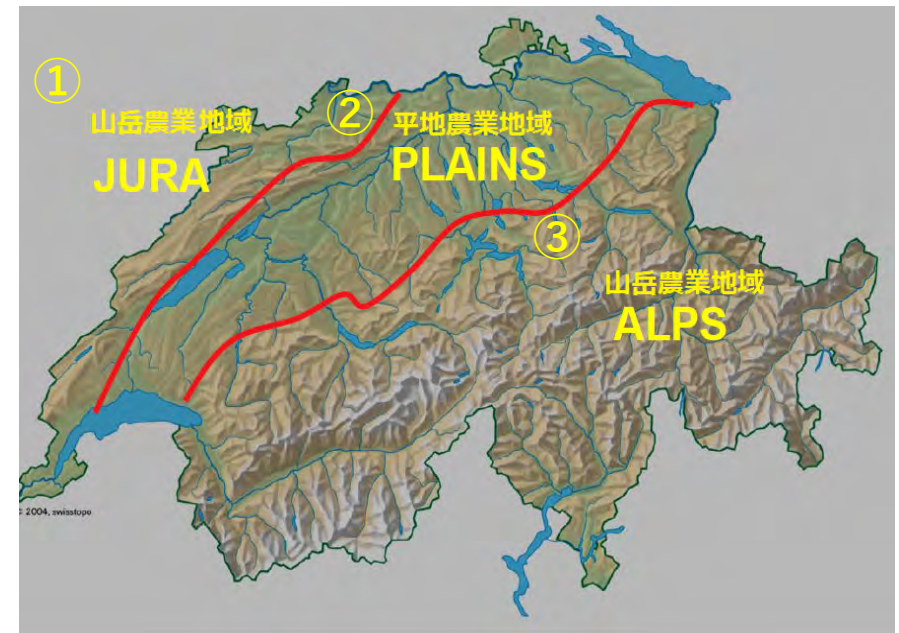
◇農業経営安定対策

- ①AgriInvest
僅かな所得の減少に対応し、リスク緩和・投資を支援するための積立制度
- ②AgriStability
価格低下や費用上昇による大幅な所得低下に対応するための政府支払い制度
- ③AgriInsurance
農業保険（収「量」保険）。自然災害や病虫害(natural hazards)による収量の減少が対象。品質低下は収量換算され保証される。
- ④AgriRecovery
通常のプログラムでは対応できないような大災害(natural disaster (病害、虫害、台風、竜巻等によるもの))への対応
- ⑤AgriRisk
農業部門で使える新たなリスク管理ツールの研究開発等の支援

スイスの農業概況

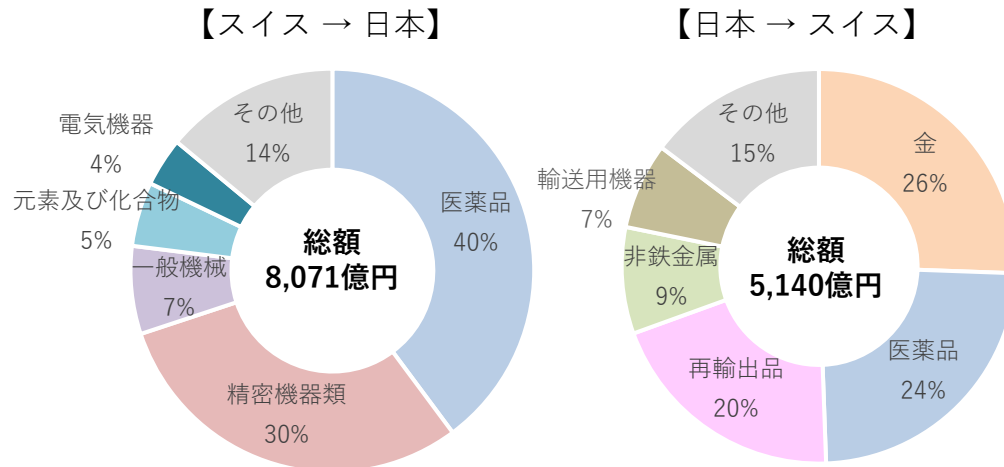
- 国土面積413万ha（日本の約1割、九州とほぼ同じ。）に対し、農用地は151万ha（日本の約1/3）で、その約7割に当たる109万haが 永年採草・牧草地となっており、耕地面積は40万ha（日本の約1割）。
- 農業経営体数は5万戸で、1経営体当たりの平均経営面積は30.1haで、日本（3ha）の約10倍。
- 農林水産業生産額は116億ドル（2020年）。
- 農業の地理的な分布は標高により特徴づけられており、大別して「平地農業地帯」は耕種作物、「山岳農業地帯」は牧草地として利用される。また、国土の約4割が海拔1,300m以上の山岳地であることから、放牧を中心とした山岳農業が広く見られる。
- 2010年以降、有機農産物の生産が増加。周囲を農業国に囲まれていることから、農産物の低価格化よりも高付加価値化を重んじる傾向にある。

地域		主要な農作物
①ジュラ山岳農業地域 ・ フランスとの国境付近	:	酪農
②平地農業地域 ・ 国土の3割を占め、人口の2/3が居住 ・ 平均標高580m	:	てん菜、小麦、ばれいしょ、ぶどう
③アルプス山岳農業地域 ・ イタリアとの国境付近 ・ 平均標高1,700m	:	酪農



我が国とスイスの農林水産貿易

日・スイス間の貿易状況 (2020)



出典：財務省貿易統計

スイスの対世界輸出状況 (2020)

品 目	輸出額 (百万ドル)	割合 (%)
コーヒー(炒)	2,846	29.2
飲料 (ノンアルコール)	1,845	18.9
調製食料品	831	8.5
チョコレート製品	751	7.7
チーズ(牛)	701	7.2
農林水産品合計	9,760	100

スイスの主な農産品生産 (2020)

品 目	生産量 (万トン)	(参考) 日 本
生乳(牛)	377	744
てん菜	142	391
小麦	53	95
ばれいしょ	49	227
豚肉	22	131
リンゴ	22	72
大麦	19	22

出典：FAOSTAT

日・スイス間の主な農林水産品の輸出入状況 (2020)

【スイス → 日本】

	品 目	輸入額(百万円)	輸入量(トン)
1	たばこ	30,112	4,381
2	コーヒー(炒ったもの)	3,876	970
3	チョコレート菓子	1,283	845
4	ナチュラルチーズ	694	509
5	製材	427	7,462
	合 計	53,316	—

【日本 → スイス】

	品 目	輸出額(百万円)
1	魚油(肝油除く)	659
2	ソース混合調味料	100
3	干しのり 焼きのり 味つけのり	94
4	醤油	85
5	アルコール飲料	85
	合 計	1,763

出典：財務省貿易統計

スイスの農業政策の概要①

(1) 総論

- スイスはEUに加盟していないため、独自の農業政策を維持しており、直接支払制度を導入している。
- 2017年9月、食料安全保障に関する条文を追加するスイス連邦憲法改正案が、国民投票で賛成多数により成立し、同法第104条に盛り込まれた（これに伴う補助金はなし）。

第104a条 連邦は国民に対する食料の供給を確保するため、以下のa～eに掲げる条件を整備する。

- a 農業生産基盤の確保、特に耕地の確保
- b 適地適作及び資源の効率的な利用による食料生産
- c 市場志向型の農業と食品産業
- d 農業と食品産業の持続的発展に寄与する国際貿易関係
- e 資源の保全に資する食料の利用

(2) 農業予算

- 2021年度の農業関連予算は国家予算全体の4.1%

国家予算及び農業関係予算

(単位：百万フラン)

	2019年度	2020年度	2021年度
国家予算	71,444	87,817	88,281
農業関係予算	3,658	3,662	3,660

出典：連邦財務省

(3) 貿易政策

- これまでに、EFTA（欧州自由貿易連合）の構成国として、また、スイス単独で、EUとの自由貿易協定をはじめとした35のFTAが発効済み（このうち、韓スイスFTAは2006年9月、日スイスEPAは2009年9月、中スイスFTAは2014年7月発効）。現在、インド等5か国とのFTAを交渉中。

スイスの農業政策の概要②

スイスは、1992年より価格支持を削減し、直接支払いを本格導入。

現在、「農業政策2018-2021」（**延期中**）に基づき、憲法で規定されている農業政策の目的（食料供給の保障、自然資源の保全、農村の維持等）に沿った以下7項目の直接支払いを実施。

受給にあたっては、環境保全要件（①家畜に配慮した飼育、②適切な肥料バランス、③規則的輪作、④適切な土壌保全、⑤農薬の適切な使用）の遵守が必要。

1. 供給保障支払	土地・ノウハウ・資本などの生産能力の維持を目的に、面積に応じて支払。
2. 農業景観支払	山岳地帯等における草地の森林化を食い止め、農業景観の維持を目的として支払。
3. 生物多様性支払	粗放的な草地・生け垣・花で覆われた休耕地など生物多様性の保全に資する取組に助成。
4. 景観の質に対する支払	多様な景観の保全・促進・開発のための地域主導の取組に助成。
5. 生産体系支払	有機農業、穀物・菜種の粗放生産、動物福祉に対する取組にかかる追加コストに対して支払。
6. 資源効率支払	資源の効率的利用や水資源保全の取組に助成。
7. 移行支払	2013年以前における所得支持政策からの移行措置として2021年まで実施。

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2022 年 5 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--